令和７年度

研 究 紀 要

～ふきのとう～

児童生徒が学びを発揮する姿を
目指した授業づくり

～自立活動の視点をふまえた国語科の指導を通して～

秋田県立比内支援学校たかのす校

は　じ　め　に

令和５・６年度の２か年にわたり取り組んできた研究テーマ「児童生徒が主体的に学び、その学びを実感する授業づくり」の成果と課題を踏まえ、今年度は新たに「児童生徒が学びを発揮する姿を目指した授業づくり～自立活動の視点をふまえた国語科の指導を通して～」を掲げ、全校体制で研究を推進してまいりました。

本研究は３か年計画の初年度に位置付けられます。昨年度は小学部が算数科、中学部・高等部が国語科を中心に研究を進めましたが、今年度は全学部において国語科を共通の研究領域とし、児童生徒の実態に根差した授業改善に取り組みました。授業づくりにあたっては、自立活動の視点を的確に踏まえるため、児童生徒一人一人の「自立活動実態シート」を活用し、丁寧な実態把握を行うことを重視しました。さらに、国語科の学習指導要領の趣旨を踏まえつつ、「単元題材一覧表」や改訂した「単元題材構想シート」を用いて、授業の構想と実践の質を高めることに努めました。

各学部では、定期・不定期の協議を重ね、「目指す姿」や「大切にしたいこと」を共有しながら、学部全体で授業づくりに向き合いました。その過程で、授業者個人の取組にとどまらず、学部全体として成果と課題を共有し、互いの実践を支え合う風土が一層醸成されたことは、本校が小規模校であるからこそ得られた大きな成果であると感じております。

ＩＣＴの効果的な活用については、昨年度に引き続き重要な柱として位置付け、研修会や情報共有の機会を積極的に設けることで、職員のスキル向上と活用の深化を図りました。今年度は、児童生徒の知識・理解を支える場面のみならず、思考力・判断力を引き出す支援としてもＩＣＴが有効に機能しました。また、中学部では、病気により登校が難しい生徒とのオンライン授業にも取り組み、ＩＣＴ活用の可能性をさらに広げる契機となりました。

本紀要を御高覧いただき、忌憚のない御指導・御助言を賜れましたら幸甚に存じます。いただいた御意見は、次年度以降の研究の深化に確実に生かしてまいります。

結びに、研究の推進にあたり、秋田県教育庁特別支援教育課指導チームの皆様より多大なる御指導・御助言を賜りましたことに、心より感謝申し上げます。今後とも、本校の研究活動に変わらぬご支援とご教導を賜りますようお願い申し上げます。

副校長　　佐　藤　　大

目　次

はじめに

Ⅰ　全校研究について・・・・・・・・・・・・・・・１

Ⅱ　学部研究について
・小学部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５
・中学部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３８
・高等部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６３

研究同人

全校研究について

１　研究主題

児童生徒が学びを発揮する姿を目指した授業づくり
～自立活動の視点をふまえた国語科の指導を通して～（１年／３か年）

２　研究主題の設定理由

（１）過年度の研究より

令和６年度は、研究主題「児童生徒が主体的に学び、その学びを実感する授業づくり」の基、教科を対象（小学部：算数科、中学部・高等部：国語科）として授業実践を通して研究を推進してきており、その成果と課題は以下のとおりである。

【成果】
- 対象教科の目標、内容をふまえた児童生徒の実態把握を行い、職員間で共有することができた。
- 児童生徒が学びを実感し、その学びを生かすことができる単元、題材の立案と改善を行うことができた。
- 学部ごとに授業づくりの要点を挙げて授業改善に取り組んだことで、具体的な改善案を出すことができた。
- ＩＣＴをただ使うだけでなく、何のために、いつ、どのように活用するのかを明確にした上で活用することができた。

【課題】
- 児童生徒が自ら学び、学びを積み重ねていくために、単元題材立案の段階から自立活動の視点を十分にふまえる必要がある。
- 児童生徒自身の気付きや考え、学びを広げていくために、単元題材研究を深め、扱う内容、教材、発問等を工夫していく必要がある。
- 単元題材一覧表、単元題材構想シート等のツールをより効果的に活用して、単元題材の改善を充実させていく必要がある。
- 「授業の検討→授業実践→検討→授業改善→さらなる検討→授業改善・・・」というように、授業改善を積み重ねていく必要がある。

（２）学校の現状と児童生徒の実態より

本校は、北秋田市に昭和 52 年に開校し、大野岱吉野学園や陽清学園等の施設に隣接している。児童生徒総数は 41 名（小学部 13 名、中学部 12 名、高等部 16 名）である。本校は知的障害のある児童生徒を対象としているが、発達障害の状態像を示す児童生徒や肢体不自由のある児童生徒なども在籍しており、障害の重度、重複、多様化が顕著である。

本校の教育目標は「自立と社会参加」であり、その達成に向けて様々な学習活動を展開してきている。これまでの取組から、児童生徒には主体性や意欲が育ってきており、様々な力を身に付けてきているが、学んだことの十分な定着、及び児童生徒自身が学びに気付き活用していく取組の充実が課題として挙げられる。

（３）学校経営方針より

- 人権の尊重と「おだやかに、ゆるやかに、ていねいに」を基本とした教師力の指導力、専門性の向上
- 体験的、実際的な学習の創意工夫と、ＩＣＴの効果的活用による授業の質の向上

３　研究の目的

- 国語科に焦点を当て、単元題材立案の段階から自立活動の視点を十分にふまえ、単元や授業の目標と評価を明確にし、他の学習活動との効果的な関連を図りながら、単元づくりを積み重ねる。
- 授業改善を積み重ねる中で、児童生徒が主体的に学び、その学びを発揮するための学習活動や手立ての在り方、ＩＣＴ機器の活用方法を明らかにする。

４　研究仮説

児童生徒一人一人が主体的に学習活動に取り組む姿や、他の場面で学びを発揮する姿を目指し、単元題材立案の段階から自立活動の視点をふまえ、単元や授業の目標や評価を明確にした単元及び授業改善を積み重ねる。こうした実践を積み重ねることで、単元や授業の質が向上し、児童生徒の資質能力を育てることにつながるだろう。

５　研究内容・方法

（１）児童生徒が学びを積み重ね、その学びを発揮する単元づくり

①児童生徒の丁寧な実態把握とその実態の共有
- ・学習指導要領に基づいた、複数の教師による実態把握と共有
- ・児童生徒の実態の定期的な見直しと共有

②児童生徒が学びを生かすことができる単元題材の立案
- ・年間を見通せる単元題材一覧表の作成
- ・対象教科と他の学習活動との効果的な関連の検討と改善

③自立活動の視点をふまえた単元づくり
- ・学部内で情報を共有した上での自立活動実態シートの作成
- ・児童生徒の自立活動の目標の共有

④単元題材の検討と改善の充実
- ・単元題材の目標と内容の明確化と精選
- ・授業で取り上げる題材や教材の検討、改善
- ・単元題材の改善の過程の可視化と共有

（２）児童生徒の学びの実感につながる一単位時間の授業づくり

①学びの実感に関する要点を絞った一単位時間の授業づくり
- ・学びへの気付きや実感、発揮につながる要点の検討
- ・要点に沿った授業改善の積み重ねと、有効な方法や手立ての具体化
- ・要点に沿って、他の学習グループの授業について知る・考える会の設定

②研究授業と授業研究会の実施
- ・各学部の事前授業研究会、全校授業研究会の実施

③ＩＣＴ機器の効果的な活用と改善
- ・研究対象となる教科における、ＩＣＴ機器活用のねらいの明確化と継続的な実施、改善

（３）実践を下支えする研修会の実施

①全校研究会の実施（全３回）

②研究日の実施（月１回程度）

③教材展示会の設定
- ・教材展示会（学部で１回、全校で１回）の実施

④ＩＣＴ機器活用に向けた研修会の定期的な実施
- ・ＩＣＴ推進リーダーと連携した全体研修会の実施（年２回程度）
- ・学部ごとに、児童生徒の実態やねらいに即したミニＩＣＴ研修の実施（月１回程度）
- ・ＩＣＴ機器の活用の一人一実践と、紹介し合う機会の設定

６　研究計画

月	全校研究会	研究日 ＩＣＴミニ研修	単元題材検討会	ＩＣＴ全体研修会 教材展示会	全校 授業研究会	その他
4	18 日（金） 全校研究について ・研究の概要、方向性の提案	18 日（金）	28 日（月） 絆プロジェクトの検討① ・単元題材一覧表の作成			
5	２日（金） 学部研究について ・学部研究重点の周知	23 日（金）	20 日（火） 対象教科の 単元題材検討① ・対象教科の年間指導計画の検討と共有			県特研 理事会①
6		23 日（月）				
7		７日（月）	25 日（金） 対象教科の 単元題材検討② ・対象教科の年間指導計画の評価と改善	ＩＣＴ 全体研修会① 教材展示会		指導主事計画訪問
8		20 日（水）				
9		８日（月）	22 日（月） 絆プロジェクトの検討② ・単元題材一覧表の修正		小学部 全校授業 研究会	
10		14 日（火）	27 日（月） 対象教科の 単元題材検討③ ・対象教科の年間指導計画の評価と改善			
11		４日（火）			中学部 全校授業 研究会	
12		１日（月）			高等部 全校授業 研究会	
1		９日（金）		ＩＣＴ 全体研修会②		県特研 理事会②
2	10 日（火） 研究の成果と課題 ・研究の成果と課題の共有 ・次年度への提案		２日（月） 対象教科の 単元題材検討④ ・対象教科の年間指導計画の評価と次年度に向けて 絆プロジェクトの検討③ ・単元題材一覧表の評価 ・次年度への提案			
3		13 日（金）				

7　研究の実際

（１）児童生徒が学びを積み重ね、その学びを発揮する単元づくり

①児童生徒の丁寧な実態把握とその実態の共有

・丁寧な実態把握のために、昨年度に引き続き「指導内容確認表／熊本大学教育学部附属特別支援学校（全校研究資料１）」を使用して、国語科における実態把握を国語科の学習グループごとに行った。実態把握をする際は、複数の教師で実態の見取りを行い、その実態把握の結果を学部職員で共有した。

・児童生徒の実態を把握した上で、学部ごとに「主体的に学ぶ姿」「学びを実感、発揮する姿について検討し、まとめた。（全校研究資料２）

＜成果：〇　課題：△＞

〇対象教科である国語科の内容をふまえた上で、児童生徒の実態を捉えることができた。この「指導内容確認表」を使用することで、取り扱う内容の時期やバランスを確認しながら、年間指導計画の立案に生かすことができた。

△国語科の学習グループごとに児童生徒の国語科に関する実態を確認したが、より細やかに実態を把握するために、自立活動に関する実態把握も併せて年度初めに行う必要があった。

②児童生徒が学びを生かすことができる単元題材の立案

・児童生徒が自身の学びに気付き、その学びの実感を高めていくためには、学びを他の学習場面で発揮、活用できる場面の設定が必要だと考え、まずは年間の主な学習内容と時期を記した、単元題材一覧表を学部ごとに作成した。

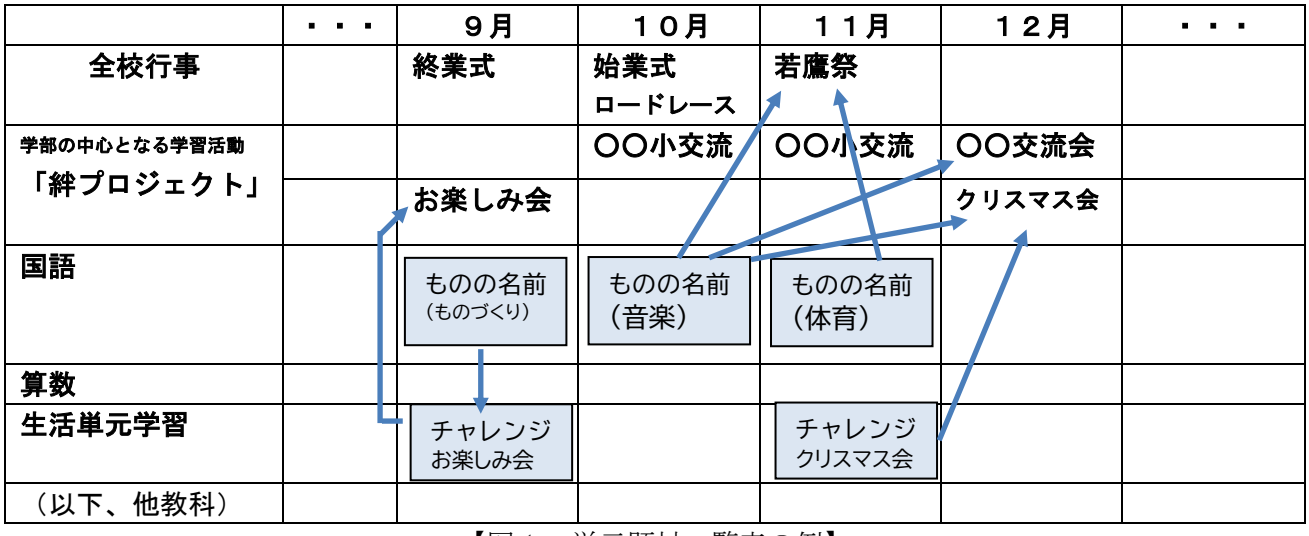
・児童生徒の学びの発揮を目指すために、４月に作成した単元題材一覧表を活用し、５月に対象教科と他の学習活動との効果的な関連を検討した。学んだことの気付き、定着や発揮ができる場面を、年度当初の段階で意識的に設定することができた。７月には、国語科の年間指導計画の評価・改善を行い、指導内容を変更、追加した。９月には、前期の取組を追加・修正し、後期の取組を検討した。（図１）

＜成果：〇　課題：△＞

〇単元題材一覧表の作成を通して、年間の学習のねらいや内容を段階的・計画的に設定することができた。

〇教師が年間の学習に見通しをもち、児童生徒の学びの発揮に対して意識を高めることができ、学びを発揮する場面を、計画的に設定することができた。

【単元題材一覧表】
縦軸に教科や学習活動、横軸に時期を記し、表の部分に単元題材の内容を記したカードを貼り付け、学習同士の関連やつながりを書き込めるようにしたもの。単元題材一覧表のデータを、学部ごとにロイロノートの共有ノートに入れておき、学部職員の誰でも記入し、活用できるようにした。



【図１：単元題材一覧表の例】

・児童生徒が学びを発揮した場面のエピソードを記録（各学部研究資料４）としてまとめた。学習グループごとに、国語科で学んだ学習内容をどの場面でどのように発揮したのかが分かるように記録を取りため、国語科の担当だけでなく、学部職員で情報交換しながら作成した。

＜成果：○　課題：△＞

○記入したエピソード記録を学部職員で情報交換しながら作成し、その内容を共有したことで、国語科の単元内容や他の学習場面に生かせるようになった。

△学びを発揮するのは学校生活だけでなく、家庭生活や放課後等デイサービス事業所等でも発揮している場合もあるので、情報交換しながらエピソード記録を作成していく必要がある。

③自立活動の視点をふまえた単元づくり

・全校研究会の中で自立活動についての学習会を行い、自立活動と各教科等との関連について全校職員で確認した。

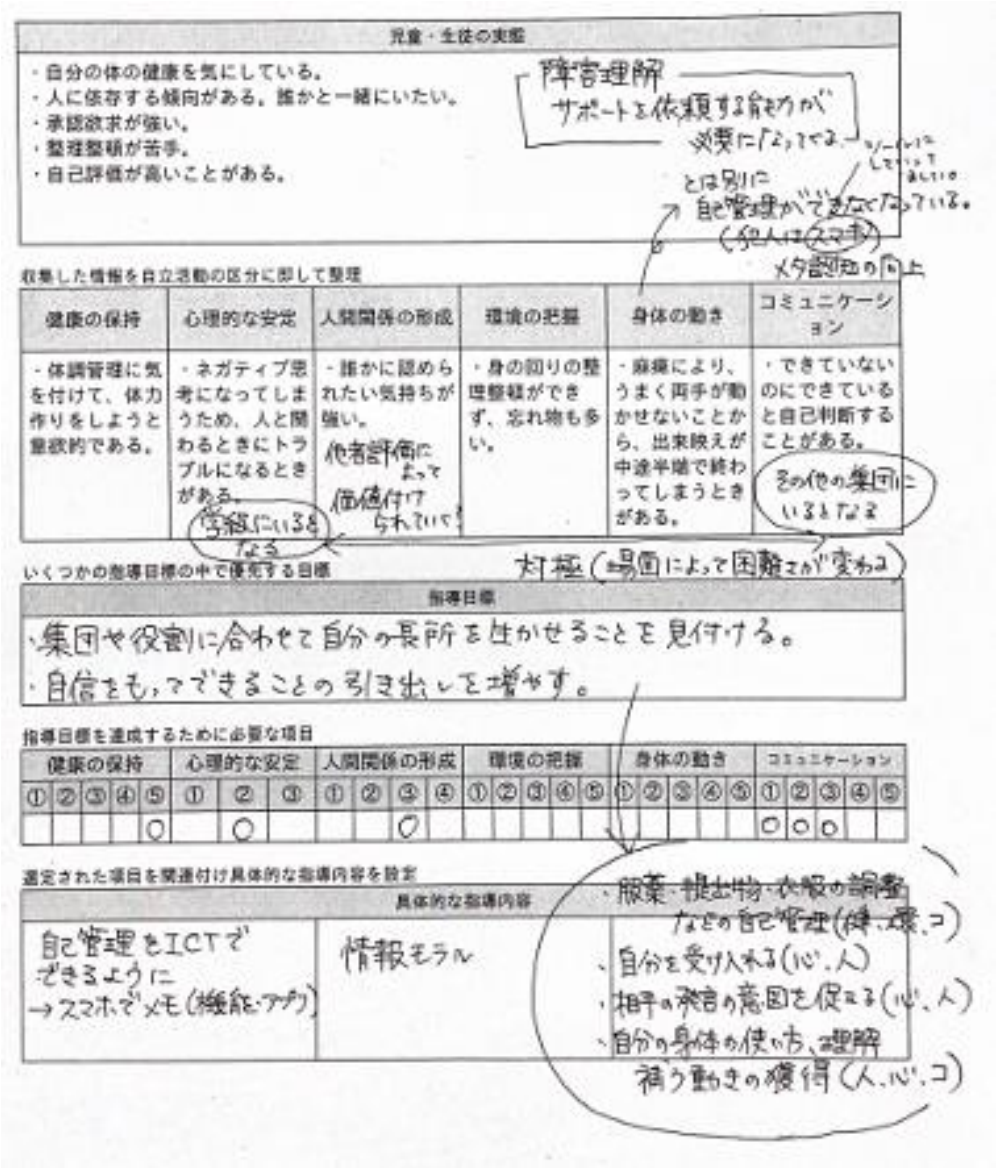
・学部内で情報を共有しながら自立活動実態シートの作成を行った。児童生徒の課題を共有し、目標を検討するなどして、自立活動実態シートを作成することができた。（図２）

・学部内で児童生徒一人一人の自立活動の目標の共有を行った。

＜成果：○　課題：△＞

○学部内で児童生徒の自立活動に関する課題や目標を共有したことで、児童生徒一人一人の自立活動の目標をふまえて、単元題材の検討や見直しを行うことができた。

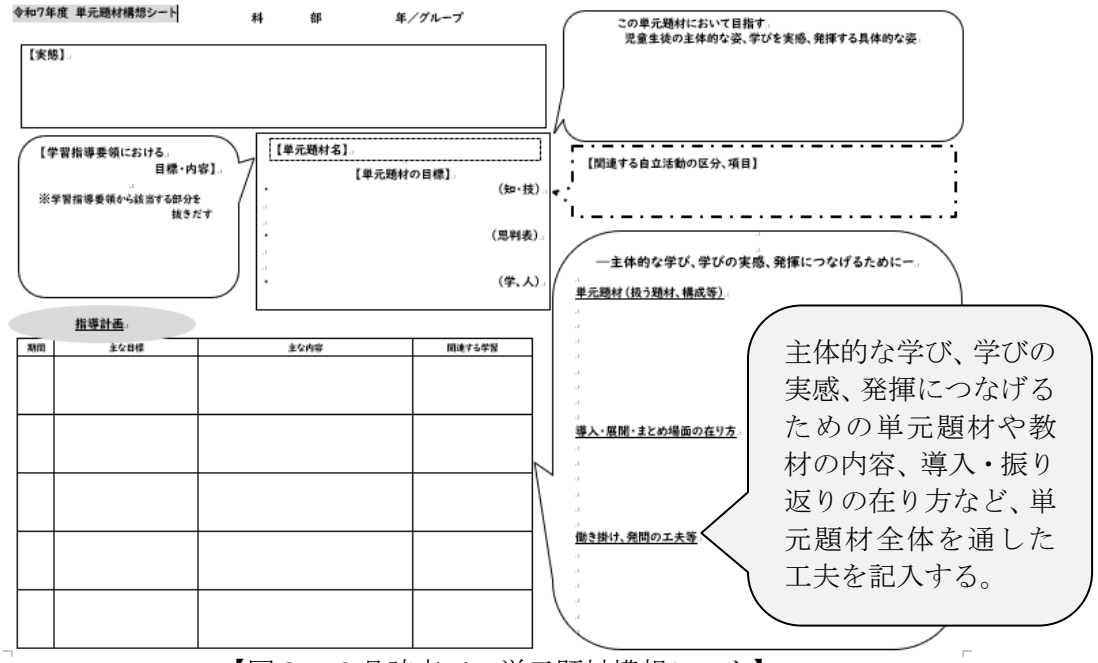
△児童生徒の自立活動の目標の共有の時期が年度途中になってしまった。自立活動の視点をふまえた計画的な単元づくりのためには、年度初めに共有したい。



【図２：自立活動実態シート（高等部）】

④単元題材の検討と改善の充実

・研究日の中で、学部ごとに単元題材の検討をする機会を設定した。単元題材構想シートを用い、単元題材の目標や扱う内容の整理、指導計画の検討を図り、明確となるようにした。（図３）

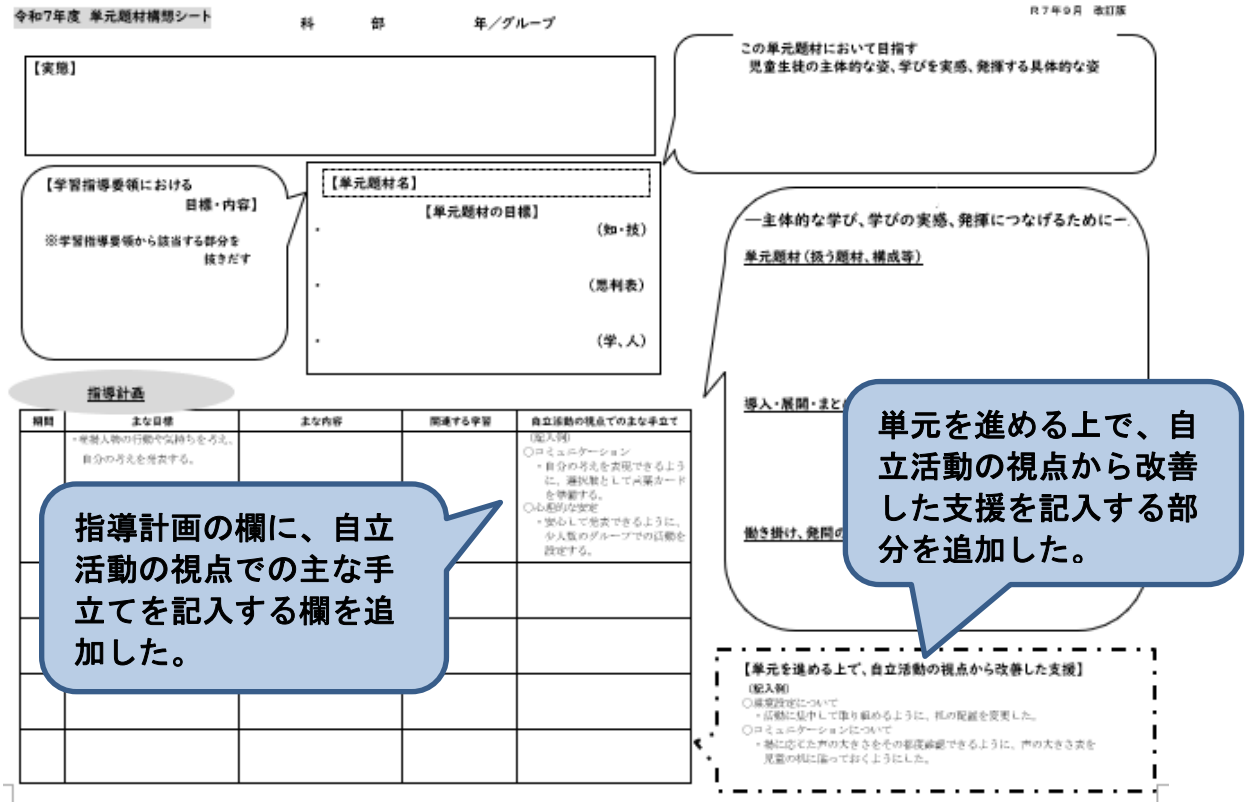


【図３：９月時点での単元題材構想シート】

・９月に行われた第１回全校授業研究会で、「自立活動の視点を取り入れ、改善した単元の内容や支援が見えるとよい」という指導助言を受けて、単元・題材検討シートの様式を変更した。シート内の指導計画に自立活動の視点での主な手立てや、単元を進める上で、自立活動の視点から改善した支援を記入する部分を追加した。（図４）

＜成果：○　課題：△＞

○単元題材構想シートに自立活動の視点での手立てや改善した支援を記入したことで、自立活動の視点を取り入れることを意識しながら単元づくりを行うことができた。



【図４：改善した単元題材構想シート】

（２）児童生徒の学びの実感につながる一単位時間の授業づくり

①学びの実感に関する要点を絞った一単位時間の授業づくり

・学びの実感や発揮につながる授業づくりを行うために、学部ごとに授業づくりにおいて大切にしたいことを挙げ、授業づくり、授業改善に取り組んだ。（図５）

・学部内で国語科の授業を知る・考える会を設定し、国語科の学習グループの授業を参観、または動画を見合う等して、情報交換や意見交換する機会を設定した。

＜成果：○　課題：△＞

○授業づくりの要点（大切にしたいこと）を絞ることで、検討する際に、具体的にどのように改善するかを話し合うことができた。

△学部内で国語科の全ての学習グループの授業改善を計画したが、研究対象の学習グループの授業改善が中心となってしまった。学部としての授業づくりをより充実したものにするため、研究対象の学習グループの授業づくりで出された意見や改善点を、他の学習グループの授業づくりに生かしていけるようにしていきたい。

小学部	中学部	高等部
・教材教具の工夫 ・繰り返しの活動 ・振り返りの工夫 ・「伝わった」と実感できる場の設定	・授業環境づくり、雰囲気づくり ・認めてもらう場面の設定 ・学んだことの蓄積	・積極的に発表できる環境づくり ・ペア学習やグループ学習の設定 ・他教科、領域で生かすことができる機会の設定

【図５：各学部の授業づくりにおいて大切にしたいこと】

②研究授業と授業研究会の実施

・全校授業研究会に向けて、小学部は７月、中学部は１０月、高等部は１１月に事前授業研究会を実施した。それぞれの事前授業研究会の協議で得た成果と課題を整理し、授業改善につなげた。（図６、図７、図８）また、事前授業研究会の記録を全校職員で共有できるようにした。

・学部内で行う事前授業研究会の他に、他の学部の職員が全校授業研究会より前に授業を参観する機会を設定した。

＜成果：○　課題：△＞

○各学部で事前授業研究会を実施したことで、授業の課題を焦点化でき、授業改善することができた。

○学部内で行う事前授業研究会の他に、他の学部の職員が事前に授業を参観する機会を設定したことで、他の学部の職員も全校授業研究会以外での授業の様子を知ることができ、全校授業研究会当日の協議が活発なものになった。

課題	改善に向けて
学習のきまり（姿勢の保持、聞く態度、声の大きさ等）	・学部集会で、児童に視覚的に分かるように学習のきまりについて伝える。
課題設定の根拠	・取り扱う言葉の精選 ・取りあげる単元題材について☆本も参考にする。
学習に対する集中力	・動きのある活動やゲーム性のある活動を取り入れ、メリハリを付ける。
めあてと振り返り	・児童にとって分かりやすいめあての表現 ・児童が自分なりの言葉で表現できたことを受け止め、即時評価する。 ・振り返りの場面で、動画を見て、児童のできていたこと、頑張っていたことを具体的に評価する。

【図６：小学部　事前授業研究会の課題と改善に向けて】

課題	改善に向けて
本時の目標（全体の目標） →１時間の目標が多い	・主語・述語、気持ちを表す言葉を用いて、相手に伝わる文章をつくることに重点をおく。
めあて まとめ 振り返り	・【めあて】生徒が分かる表現にする。 ・【まとめ】めあてが達成したかどうかを全体で確認する。 ・【振り返り】生徒が自分の学びを振り返り、全体で共有する。 ・めあて、まとめ、振り返りのつながりをもたせる。
教材の工夫 （２コマ漫画、生徒が吹き出しの内容や文を考えるための情報が少ない）	・２コマ漫画で、誰が、何をしているか、どんな気持ちかということが分かるような漫画にする。

【図７：中学部　事前授業研究会の課題と改善に向けて】

課題	改善に向けて
テーマの精選	・日常生活に直結するテーマを生徒からアンケートを通じて決める。
話し合いのための教材の工夫 環境の整備	・話型カードの使用頻度を減らす、なくす。 ・ロイロノート（メモ）の情報量を減らす。
めあてと振り返り まとめを深める手立て	・【めあて】本時のゴールが分かる表現 ・【振り返り】生徒が本時の学びを振り返り、全体で共有する。 ・【まとめ】他者の意見を聞いて、自分の意見がどのように変化したかを記入できるよう、記入例を提示する。

【図８：高等部　事前授業研究会の課題と改善に向けて】

［第１回全校授業研究会］

小学部国語２グループ　「めざせ！ことばマスター」

日常生活でつかす動作の言葉を題材とした。「ものづくり」の言葉として、粘土を使って、「まるめる」「のばす」という言葉を、体験を通して学ぶ学習。

主な成果	主な課題
学習への意欲を高める教材選定	題材とする言葉の選定、言葉のイメージを膨らませる支援
児童が学びを実感できる活動	振り返りの在り方
ＴＴの役割	学習の積み重ねが見える支援

［第２回全校授業研究会］

中学部国語Ａグループ　「言葉のめいたんてい②」

主語や述語、気持ちを表す言葉、「いつ」「どこで」などを使って２コマ漫画を説明するためめの文をつくる学習。

主な成果	主な課題
個に合った課題設定	２コマ漫画の題材の選定 （経験したこと、季節に合った題材）
ＩＣＴの効果的な活用	文法の学習、言葉の使い方
伝わる経験の積み重ね	

［第３回全校授業研究会］

高等部国語Ａグループ　「豊かな表現で伝え合おう～テーマについて話し合う～」 考えやその理由、事例など、情報と情報の関係を理解し、立場や意図を明確にして考えを伝え合う学習。	
主な成果	主な課題
活発な話合い	生徒の実態に合わせた支援
自分の意見をまとめやすい様式	ノンバーバルコミュニケーション（表情、うなずき等）
将来につながる振り返り	

③ＩＣＴ機器の効果的な活用と改善

・国語科において、ＩＣＴ機器の効果的な活用方法について検討し、実践を重ねた。主に、動画や写真機能、ロイロノートを使用した。

＜成果：○　課題：△＞

○ＩＣＴの活用自体が目的とならないよう、何のために、どのように活用するのかを明確にしながら活用することができた。今後も、児童生徒の主体的な学びや学びの実感、発揮につながるように効果的な活用の在り方を探っていきたい。

△障害による学習上または生活上の困難を改善・克服するために、自立活動の視点によるＩＣＴ活用については、さらなる検討が必要である。

（３）実践を下支えする研修会の実施

①全校研究会の実施（全３回）

・４月に全校研究の概要を、５月に学部研究の内容・重点などを全職員に周知し、方向性を確認した。また、５月の全校研究会の中で、秋田県教育庁特別支援教育課の「特別支援学校　自立活動ガイド」を参考にしながら、全校職員で自立活動の必要性や教育課程上の位置付け等をおさえ、国語科で行われる支援が、自立活動のどの区分、どの項目にリンクしているのかに気付くことが大切となるということを周知した。

＜成果：○　課題：△＞

○全校研究、学部研究の方向性、国語科と自立活動の関連付けに関して、全職員で共通理解を図りながら研究を進めることができた。

△自立活動の視点をふまえた単元、授業づくりを行うに当たって、自立活動に関する職員研修を充実させたい。

②研究日の実施（月１回程度）

・月１回、学部ごとに研究日を実施し、授業づくりを進めた。また、全校授業研究会で出された意見を基に、授業改善につなげた。

＜成果：○　課題：△＞

○研究や授業づくりについて、職員が意見を出し合い、授業改善につなげることができた。

△学部ごとに話し合う機会は充実していたが、学部の研究日の記録の共有や学部を超えた話合いなど他学部の研究についても知る機会もあるとよい。

③教材展示会の設定

・７月に、全職員で国語科、算数科・数学科の教材を持ち寄って教材展示会を実施した。

＜成果：○　課題：△＞

○教材を見合うことで、他のグループの授業について知り、各々の授業づくりの参考にすることができた。

△今年度は全校単位で実施したが、全校単位だけの実施だけでなく、学部単位での実施、実施回数を増やすなど、実施の仕方を工夫したい。

【教材展示会の様子】

④ＩＣＴ機器活用に向けた研修会の定期的な実施

・ＩＣＴ推進リーダーと連携して、夏季休業中と冬季休業中にＩＣＴ全体研修会を実施した。夏季休業中には、職員の希望に沿ってロイロノートの基礎、ロイロノートの活用、Ｃａｎｖａの３つのグループに分かれて、研修を行った。冬季休業中には、スイッチ教材体験、生成ＡＩ体験、ロイロノート等のお悩み相談コーナーの３つの体験、相談コーナーを設け、研修を行った。

・学部ごとに、月１回の研究日と合わせる形で、ＩＣＴミニ研修を実施した。学部の児童生徒の実態に即した内容（電子黒板操作、タブレット操作やアプリなど）を取り上げ、日々の授業に生かせるような内容を取り上げて実施した。

・ＩＣＴ活用の一人一実践に取り組んだ。職員一人一人がＩＣＴ機器を活用した授業を行い、活用のねらいや実際の様子をまとめ、１０月に「ＩＣＴ事例共有会」を実施し、お互いの実践を共有し合う会を実施した。情報交換の後、学部ごとに集まり、今後のＩＣＴ活用について話し合う時間を設定した。

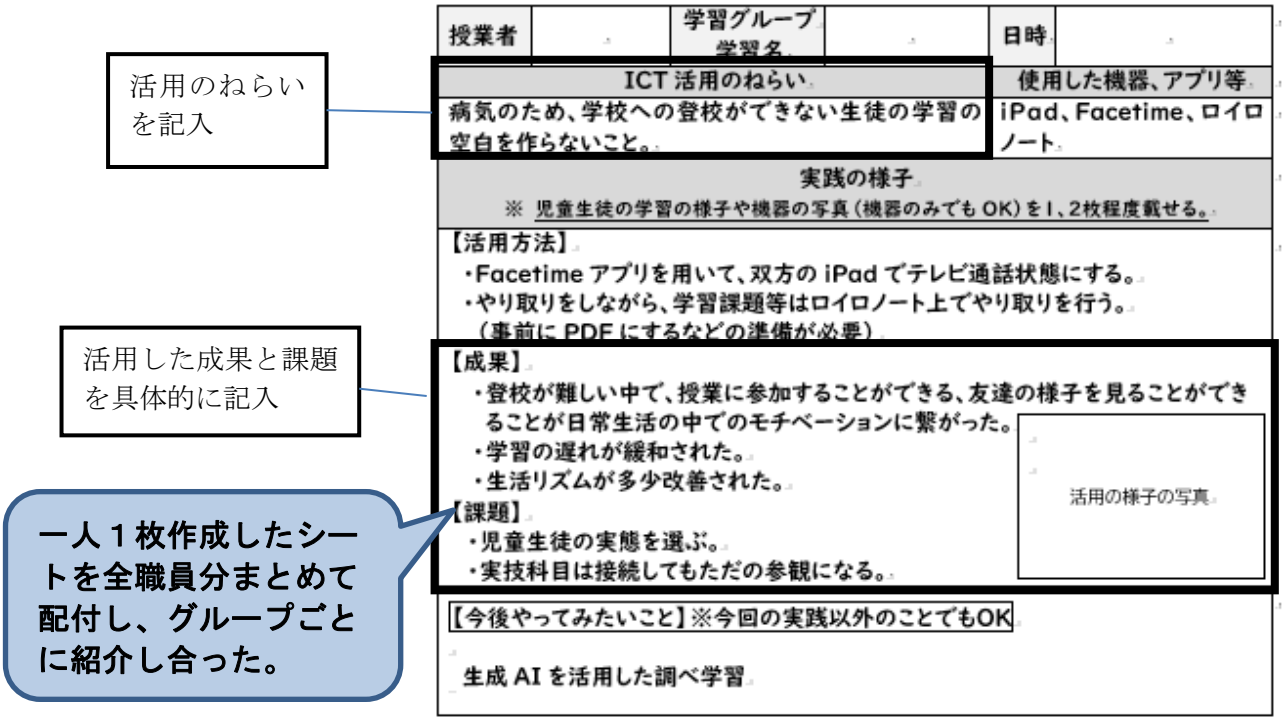
＜成果：〇　課題：△＞

〇ＩＣＴ全体研修会で、ロイロノートやＣａｎｖａなどのアプリを実際に操作しながら学ぶことができ、授業での活用につながった。

〇一人一実践に取り組み、実践を紹介し合うことで、職員一人一人のＩＣＴ活用に対する意欲が高まり、活用の幅が広がった。

△学部ごとに行うＩＣＴミニ研修を実施したが、職員の困り感や悩み事などに対応できるような研修内容を充実させたい。

△「ＩＣＴ事例共有会」に限らず、校内のＩＣＴ活用の事例を知る、共有する機会もあるとよい。



【図９：ＩＣＴ実践シート例】

８　成果と課題

成　果

（１）児童生徒が学びを積み重ね、その学びを発揮する単元づくり

・国語科の目標、内容をふまえた児童生徒の実態把握と共有

国語科の学習指導要領の内容をふまえた上で、丁寧に児童生徒の実態を把握して職員間で共有することができた。また、国語科の全内容を見渡し、扱う内容や時期、バランスなどを考慮でき、年間指導計画の立案に役立てることができた。

・児童生徒が学びを生かすことができる単元題材の立案

単元題材一覧表を活用し、年間の学習のねらいや内容を段階的・計画的に設定することができた。また、児童生徒が学んだことに気付き、その学びの定着や発揮につながるような単元題材を設定することができた。

児童生徒が学びを発揮した場面のエピソードを学部職員で情報交換しながら記録としてまとめ、その記録の内容を共有したことで、国語科や他の学習の単元づくりに生かすことができた。

・自立活動の視点をふまえた単元づくり

学部内で児童生徒の自立活動に関する課題や目標を共有したことで、児童生徒一人一人の目標をふまえて、単元題材の検討や見直しにつなげることができた。

・単元題材の検討と改善の充実

単元題材構想シートの様式を変更し、自立活動の視点での手立てや改善した支援を記入する欄を加えたことで、自立活動の視点を取り入れることを意識した単元づくりにつなげることができた。

（２）児童生徒の学びの実感につながる一単位時間の授業づくり

・学びの実感に関する要点を絞った授業づくり

学部ごとに授業づくりの要点（大切にしたいこと）を絞って授業づくりに取り組んだことで、具体的な改善案を出し合うことができた。国語科の学習グループの担当者だけでなく、全ての学部職員が授業づくりに携わることができた。

・授業研究会の成果と課題をふまえた授業改善

事前授業研究会、全校授業研究会で得た成果と課題を整理し、各学部で話し合ったことで、具体的な授業改善につなげることができた。

・ＩＣＴの効果的な活用と改善

ＩＣＴの活用自体が目的とならないように、何のために、どのように活用するのかを明確にしながら、効果的な活用につなげることができた。

（３）実践を下支えする研修会の実施

・研究日の活用

月１回、学部ごとに実施して授業づくりを進めた。学部内の授業検討や全校授業研究会の成果と課題などの共有を行い、授業改善につなげることができた。

・授業づくりに関する情報共有

全校職員で国語科・算数科・数学科の教材を持ち寄り、教材展示会を実施した。教材や説明書きを見合い、質問するなど、他の学習グループの授業について知り、自己の授業に生かそう

とする様子が見られた。

・ＩＣＴ活用に向けた研修会の実施

全体研修会、学部ごとのミニ研修会を実施し、児童生徒の実態に即した内容や職員の希望する内容を取りあげたことで、授業での活用につなげることができた。また、ＩＣＴの一人一実践にも取り組み、様々な活用を共有することができた。

課　題

（１）児童生徒が学びを積み重ね、その学びを発揮する単元づくり

・児童生徒の実態把握

国語科の学習グループごとに実態を確認したが、より細やかに実態を把握するために、自立活動に関する実態把握も併せて年度初めに行う必要がある。

・学びを発揮した姿の見取り

児童生徒が学びを発揮する場面は、学校生活以外も考えられるので、家庭や放課後等デイサービス事業所等と情報交換しながら、発揮した姿を見取っていく必要がある。

・自立活動の視点をふまえた単元づくり

児童生徒の自立活動の目標に関する検討や共有する場を年度初めに設定し、単元づくりにつなげていく必要がある。

（２）児童生徒の学びの実感につながる一単位時間の授業づくり

・学びの実感に関する要点を絞った授業づくり

研究対象の学習グループの授業づくりで出された意見や改善点を、他の学習グループの授業づくりに生かし、学部としての授業づくりをより充実させていく必要がある。

・ＩＣＴの効果的な活用と改善

障害による学習上または生活上の困難を改善・克服するために、自立活動の視点によるＩＣＴ活用について、さらなる検討が必要である。

（３）実践を下支えする研修会の実施

・自立活動に関する研修

自立活動の視点をふまえた単元、授業づくりを行うために、自立活動と各教科等との関連付けに関する研修を充実させる必要がある。

・日々の授業づくりに生かせる研修の設定

学部の研究日の内容の共有や教材を紹介し合う機会を充実させる必要がある。

・ＩＣＴ活用に向けた研修会の実施

職員の困り感や悩み事に対応できるような研修内容やＩＣＴ活用の事例を共有する機会の設定など、研修する機会を充実させていく必要がある。

全校研究資料 1

国語　指導内容確認表

平成29年4月公示 特別支援学校 小学部・中学部学習指導要領より

平成31年2月公示 特別支援学校 高等部学習指導要領より

東京学芸大学 ユニバーサルデザイン教育センター
https://www.u-gakugei.ac.jp/~ud/

拡充

2020013 ver. 埼玉大学教育学部附属特別支援学校 教材教具/次ニュプロジェクト

		小学部			中学部		高等部	
		1段階	2段階	3段階	1段階	2段階	1段階	2段階
		内容	内容	内容	内容	内容	内容	内容
知的障害	(1) 言葉の特徴や使い方	言葉の働き	ア [1] 身近な人との話し掛けに関心、言葉が事物の内容を表していることを感じること。	ア [1] 身近な人との話し掛けや身辺などの話し言葉に関心、言葉が、気持ちや要求を表していることを感じること。	ア [1] 身近な人との会話や読み聞かせを通して、言葉には、事物の内容を表す働きがあることに気付くこと。	ア (1) 身近な大人や友達とのやり取りを通して、言葉には、事物の内容を表す働きや、経験したことを伝える働きがあることに気付くこと。	ア (1) 日常生活の中で大切な人とのやり取りを通して、言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付くこと。	ア [1] 社会生活に係る人とのやり取りを通して、言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付くこと。	ア [1] 社会生活に係る人とのやり取りを通して、言葉には、相手とのつながりをつくる働きがあることに気付くこと。	言葉の特徴や使い方
		話し言葉と書き言葉		[1] 必要中心に気を付けて話すこと。	[1] 発音の声の大きさに気を付けて話すこと。	[1] 発音の声の大きさに気を付けたり、声の大きさを調節したりして話すこと。	[1] 相手を見て話したり聞いたりするとともに、関係の取り方などに注意して話すこと。	[1] 話し言葉と書き言葉に違いがあることに気付くこと。		
		語彙		[1] 日常生活で よく使われている平仮名を読むこと。	[1] 身近、物事、姿勢、様態、助詞の正しい読み方や書き方を知ること。	[1] 形、物事、状態、程度などの表記や助詞の使い方を理解し、文の文章の中で使うこと。	[1] 漢字と仮名を使い分ける表記や送り仮名の付け方を理解して文の文章の中で使うとともに、句読点の使い方を発展して行うこと。	[1] 文の文章の中で漢字と仮名を使い分けて書くこと。		
				[5] 身近な人との会話を通して、物の名前や動作など、いろいろな言葉の種類に触れること。	[1] 言葉には、意味による語句のまとまりがあることに気付くこと。	(1) 言葉には、意味による語句のまとまりがあることを理解するとともに、話し方や書き方によって意味が異なる語句があることに気付くこと。	(1) 身近、物事、状態、程度などの表記や助詞の使い方を理解し、文の文章の中で使うこと。	[1] 身近な人との会話を通して、物の名前や動作など、いろいろな言葉の種類に触れること。	[1] 身近な人との会話を通して、物の名前や動作など、いろいろな言葉の種類に触れること。	
		文や文章		[1] 文の中における主語や述語などの関係や助詞の使い方により、意味が変わることを知ること。	(1) 主語と述語の関係や接続する語句の役割を理解すること。	(1) 修飾と被修飾との関係、指示する語句の役割について理解すること。	(1) 修飾する語句の役割、段落の役割について理解すること。	[1] 文と文との接続の関係、語や文章の構成や種類について理解すること。		
		言葉遣い			(1) 場面に応じた言葉の違いに気を付けて、丁寧な言葉を使うこと。	(1) 場面に応じた言葉があることを理解し、その違いに注意しながら書くこと。	(1) 目常よく使われる敬語を理解し使うこと。	(1) 目常よく使われる敬語を理解し使い慣れること。		
		音読		[1] 正しい姿勢で音読すること。	(1) 話のまとまりに気を付けて音読すること。	(1) 内容の大小を意識しながら音読すること。	(1) 文章の構成や内容の大小を意識しながら音読すること。	[1] 文章を音読したり、朗読したりすること。		
	(2) 情報の結び方	情報と情報の関係		ア [1] 物事の比較における特ポイントなど、情報と情報との関係について理解すること。	イ (1) 事柄の順序など、情報と情報との関係について理解すること。	イ (1) 考えとそれを支える理由など、情報と情報との関係について理解すること。	情報と情報の関係	ア [1] 考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など、情報と情報との関係について理解すること。	イ [1] 原因と結果など、情報と情報との関係について理解すること。	
		情報の整理		[1] 図書を用いた調べ方を理解し使うこと。		(1) 必要な語や語句の書き留め方や、はや方などの情報の整理の仕方を理解し使うこと。	情報の整理	(1) 比較や分類の仕方、辞書や事典の使い方などを理解し使うこと。	[1] 情報と情報との関係付けの仕方を理解し使うこと。	
	(3) 我が国の言語文化	伝統的な言語文化	イ [1] 昔話などについて、読み聞かせを聞くなどして親しむこと。 [1] 遊びを通して、言葉のもつ楽しさに触れること。	[1] 昔話や童謡の歌詞などの読み聞かせを聞いたり、見たりしやすなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと。 [1] 遊びやゲームを通して、言葉による表現に親しむこと。	ウ [1] 昔話や神話・伝承などの読み聞かせを聞き、言葉の響きやリズムに親しむこと。 [1] 遊本事の短歌などに触れたことを伝え合う体験を通して、いろいろな語句や文の表現に触れること。	ウ (1) 自然や季節の言葉を取り入れた俳句などを聞いたり、音読したりすることを通して、言葉の響きやリズムに親しむこと。 (1) 伝統的な遊びや行事などに関心をもち、参加したり、参観したりすること。	ウ (1) 楽しい文語調の短歌や俳句を音読したり暗唱したりすることを通して、言葉の響きやリズムに親しむこと。 (1) 本活に係るなどにおける伝統的な言語文化に関心をもち、進んで参加しようとすること。	伝統的な言語文化	ウ (1) 生活に係るなどにおける伝統的な言語文化に関心をもち、進んで参加しようとすること。	ウ [1] 親しみやすい文などの文章を音読するなどして、言葉の響きやリズムなどに親しむこと。 [1] 本活の中で受け入れる慣例や、社会生活などにおける慣用句を知り、使うこと。	我が国の言語文化
		書写		[1] 書くことに関する次の事項を理解し使うこと。 ア いろいろな筆記用具に触れ、書くことをおおまかに。 イ 筆記用具の持ち方や、正しい姿勢で書くことをおおまかに。	[1] 書くことに関する次の事項を理解し使うこと。 ア いろいろな筆記用具を用いて、書くことに親しむこと。 イ 自由に合った筆記用具を選び、書くこと。	(1) 書くことに関する次の事項を取り扱うこと。 ア 筆記用具の正しい持ち方や書くときの正しい姿勢を理解して、正しく書くかたや使い書きなど、書写の基本を身に付けること。 イ 筆記用具の持ち方を正しくし、平仮名や片仮名の文字の形に注意しながら書くこと。	(1) 書くことに関する次の事項を取り扱うこと。 ア 必要の筆記用具の持ち方を正しくし、文字の形に注意しながら、丁寧に書くこと。 イ 点画相互の接し方や文字の大きさなどに注意して文字を書くこと。	(1) 書くことに関する次の事項を取り扱うこと。 ア 点画の書き方や文字の形に注意しながら、筆順に従って、丁寧に書くこと。 イ 漢字や仮名の大きさ、配列に注意して書くこと。	書写	(1) 書くことに関する次の事項を取り扱うこと。 ア 点画の書き方や文字の形に注意しながら、筆順に従って、丁寧に書くこと。 イ 文字の組み立て方を理解し、形を整えて書くこと。	(1) 書くことに関する次の事項を取り扱うこと。 ア 用紙全体との関係に注意して、文字の大きさや配列などを決めて書くこと。 イ 目的に応じて使用する筆記具を選び、その特徴を生かして書くこと。	
		読書		[1] 読み聞かせに親しんだり、文字を拾い読みしたりして、いろいろな絵本や図鑑などに興味をもつこと。	[1] 読み聞かせなどに親しみ、いろいろな絵本の図鑑があることを知ること。	(1) 読書に親しみ、進んで様々な物語や、自然や事象などの美しさを感じ入れや知行文などがあることを知ること。	(1) 幅広く読書に親しみ、本には いろいろな種類があることを知ること。	読書	(1) 幅広く読書に親しみ、読書が、必要な知識や情報を得ることに役立つことに気付くこと。	(1) 目常的に読書に親しみ、読書が、自分の考えを広げることに役立つことに気付くこと。		
日本語を主とする児童生徒	A 聞くこと・話すこと	話題の設定	ア 教師の話や読み聞かせに応じ、音声を模倣したり、表情や身振り、簡単な話し言葉などで表現したりすること。	ア 身近な人の話に進め、簡単な事柄と話句などを結び付けたり、話句などから事柄を思い浮かべたりすること。			ア 身近な人との話や簡単な形成などを聞き、聞いたことを書き留めたり分かりやすいことを聞き返したりして、話の大事を捉えること。	話題の設定			
		内容の把握	イ 身近な人からの話し掛けに注目したり、応じて答えたりすること。	イ 簡単な指示や説明を聞き、その指示等に応じた行動をすること。	ア 絵本の読み聞かせなどを通して、出来事などに話の大体を聞き取ること。	ア 身近な人の話や簡単な形成などを聞き、聞いたことを書き留めたり分かりやすいことを聞き返したりして、話の大事を捉えること。	イ 話す事柄を思い浮かべ、伝えたいことを明確にすること。	内容の把握	ア 社会の中で関わる人の話などに、話し手が伝えたいことの中心に注意して聞き、話の内容を捉えること。	ア 社会の中で関わる人の話などについて、話し手の目的や自分が関わりたいことの中心を捉え、その内容を捉えること。	
		内容の検討	ウ 伝えたいことを思い浮かべ、発振りや表声などで表すこと。	ウ 身振りや こなどについて、伝えたいことを考えること。	イ 経験したことを思い浮かべ、伝えたいことを考えること。	イ 話す事柄を思い浮かべ、伝えたいことを決めること。	イ 相手や目的に応じて、自分の伝えたいことを明確にすること。	内容の検討	イ 目的や意図に応じて、話題を決め、集めた材料を比較するなどして伝え合うために必要な事柄を選ぶこと。	イ 目的や意図に応じて、話題を決め、集めた材料を比較したり分類したりして、伝え合う内容を検討すること。	
		構成の検討			ウ 見聞きしたことなどのあらましや自分の気持ちなどについて思いついたり、考えたりすること。	ウ 見聞きしたことや経験したこと、自分の意見などについて、内容の大体が伝わるように伝える順序等を考えること。	ウ 見聞きしたことや経験したこと、自分の意見などの理由について、内容の大体が伝わるように伝える順序で伝えたりすること。	構成の検討	ウ 話の中心が明確になるように話の構成を考えること。	ウ 話の内容が明確になるように、話の構成を考えること。	
		表現		エ 挨拶をしたり、簡単な自分などを表現したりすること。	エ 挨拶や電話の受け答えなど、決まった言い方を使うこと。 オ 相手に伝わるよう、発音や声の大きさに気を付けること。	エ 自己紹介や電話の受け答えなど、相手や目的に応じた話し方で話すこと。	エ 相手に伝わるように発音や声の大きさ、速さに気を付けて話したり、必要な話し方をえんしたりすること。	表現	エ 相手に伝わるように、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などを工夫すること。	エ 資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫すること。		
		話し合い		カ 相手の話に関心をもち、自分の思いや考えを相手に伝えたり、相手の思いや考えを受け止めたりすること。	カ 相手の話に関心をもち、分かったことや感じたことを伝え合い、考えをもつこと。	オ 物事を決めるために、簡単な役割や進め方に沿って話し合い、考えをまとめること。	オ 物事を決めるために、目々などの役割を果たしながら話し合い、互いの意見の共通点や相違点に着目して、考えをまとめること。	話し合い	オ 自的や進め方を確認し、見通などの役割を果たしながら話し合い、互いの意見の共通点や相違点に着目して、考えをまとめること。	オ 互いの立場や意図を明確にしながら、計画的に話し合い、考えをまとめたりすること。		
	(2) B 書くこと	題材の設定・情報の収集	ア 身近な人との関わりや出来事について、伝えたいことを思い浮かべられ、選んだりすること。	ア 身近で経験したことについて、写真などを手がかりにして、伝えたいことを思い浮かべたり、選んだりすること。	ア 身近で見聞きしたり、経験したりしたことについて書きたいことを見付け、その題材に必要な事柄を集めること。	ア 見聞きしたことや経験したことの中から、伝えたい事柄を選び、書く内容を大まかにまとめること。	ア 相手や目的を意識して、見聞きしたことや経験したことの中から書くことを選び、伝えたいことを明確にすること。	題材の設定・情報の収集	ア 相手や目的を意識して、書くことを決め、集めた材料を比較するなどし、伝えたいことを明確にすること。	ア 目的や意図に応じて、書くことを決め、集めた材料を比較・分類したりして、伝えたいことを明確にすること。	
		内容の検討・構成の検討		イ 見聞きしたり、経験したりしたことから、伝えたい順序を考えること。	イ 相手に伝わるように事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること。	イ 書く内容の中心を決め、自分の考えと理由などとの関係を明確にして、文章の構成を考えること。	内容の検討・構成の検討	イ 書く内容の中心を決め、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えること。	イ 段落の成り立ちなどを理解し、文章全体の構成を考えること。	
		記述	イ 文字に興味をもち書こうとすること。	イ 自分の名前や物の名前を文字で表すことができることを知り、簡単な平仮名をなぞったり、書いたりすること。	ウ 見聞きしたり、経験したりしたことについて、簡単な語句や短い文を書くこと。	ウ 文の構成、語句の使い方に気を付けて書くこと。	ウ 事実と自分の考えとの違いなどが相手に伝わるように書き表し方を工夫すること。	記述	ウ 自分の考えや行為を支える理由の事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫すること。 エ 引用したり、図表やデジタルなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。	ウ 目的や意図に応じて簡単に書いたり話したり、事実と感想、考えを区別して書いたりするなどし、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。	
		推敲		エ 書いた語句や文を読み、間違いを正すこと。	エ 自分が書いたものを読み返し、間違いを正すこと。	エ 文章を読み返す習慣を身に付け、間違いを正したり、語と語との続き方を確かめたりして、文の文章を整えること。	推敲	エ 間違いを正したり、相手や目的を意識した表現になっているか確かめたりして、文の文章を整えること。	オ 文章全体の構成の整え方などを理解し、文の文章を整えること。	
		共有		オ 友達が書いたものに興味をもって聞くこと。	オ 文章に対する感想をもち、伝え合うこと。	オ 文章に対する感想をもち伝え合い、内容や表現のよいところを見付けること。	共有	オ 書こうとしたことが明確になっているなど、文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付けること。	カ 文章全体の構成や表現が明確になっているなど、文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付けること。	
	(3) C 読むこと	構成と内容の把握	ア 教師に一緒に絵本などを見て、示された身近な事柄の生き物などに気付き、注目すること。 イ 絵本などを見て、知っている事物の絵本事などを指さしなどで表現すること。 ウ 目や手の分などの記号で表された表現に気に、行動すること。	ア 教師に一緒に絵本などを見て、登場するものや動作などを思い浮かべること。 イ 教師に一緒に絵本などを見て、時間の経過などの大体を捉えること。 ウ 日常生活で よく使われている表示などの物理に気付き、読もうとしたり、表された表現に応じた行動をしたりすること。	ア 絵本の易しい読み物などを読み、時間に沿って登場人物の行動や場面の様子などを想像すること。 イ 絵本や易しい読み物などを読み、時間的な順序など内容の大体を捉えること。 ウ 日常生活で必要な語句や文、連絡などを読み、必要な物を選ぶなどが行動しようすること。	ア 簡単な文や文章を読み、様子や場面の様子、登場人物の心情などを想像すること。 イ 話の語句や表現をもとに時間的な順序や事柄の順序などに内容の大体を捉えること。 ウ 日常生活で必要な語句や文章などを読み、行動すること。	ア 様々な読み物を読み、様子や場面の様子、登場人物の心情などを想像すること。 イ 話の全体や文と文との関係をもとに、出来事の順序や気持ちの変化など内容の大体を捉えること。 ウ 日常生活での社会生活、職業生活に必要な語句、文章、表示などの意味を読み取り、行動すること。 エ 中心になる話句や文を明確にしながら読むこと。	構成と内容の把握	ア 登場人物の行動や心情などについて、話題を基に捉えること。 イ 段落相互の関係に着目しながら、考えとそれを支える理由や事例との関係などについて、話題を基に捉えること。 ウ 登場人物の心情や様子等について、場面と話が付けて具体的に想像すること。	ア 登場人物の相互関係やの様などについて、描写を基に捉えること。 イ 事実と感想、意見などとの関係を描述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握すること。 ウ 人物像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすること。 エ 目的を意識して、文章に図表などを描け付けるなどして、必要な情報を見付けること。	
		考えの形成	エ 絵本などを見て、次の場面を楽しみにしたり、登場人物の動きなどを模倣したりすること。	エ 絵本などを見て、好きな場面を伝えたり、言葉などを模倣したりすること。	エ 登場人物になったつもりで、音読したり演じたりすること。	エ 文章を読んで分かったことを伝えたり、感想をもったりすること。	オ 読んで感じたことや分かったことを伝え合い、一人一人感じ方などに違いがあることに気付くこと。	考えの形成	オ 文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつこと。	オ 文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめること。		
		1段階	2段階	3段階	1段階	2段階	1段階	2段階
		小学部			中学部		高等部	

学部で目指す姿、大切にしたいこと

小学部　国語科

【主な実態】

・普段使っている身近な言葉は、ある程度理解できている。
・言葉が少ない児童が多く、グループ内でも実態差がある。
・話を聞くことに課題のある児童が多い。
・興味の幅は狭いが、操作性のある活動や興味のある活動、見通しのもてる活動には取り組める。

【主体的に学ぶ姿】

・見通しをもって、自分から取り組む姿
・自分から安心して教材に手を伸ばす姿
・課題を受け入れて、やってみる姿
・友達の姿、やっていることを見る姿

【学びを実感、発揮する姿】

・「できた」と伝える姿
・教師から称賛されることで学びの実感につながる。
・カードの中から聞いた言葉に当てはまるものを選ぶ姿
・学んだことを自分なりの方法で表し、他の場面でやろうとする姿
・自分の得意なものを選ぶ姿

【大切にしたいこと】

・安心して取り組める教材教具の工夫
・楽しく学ぶことのできる活動
・繰り返しの活動（学びを繰り返し、積み重ねていく。）
・振り返りの場面で、学習したことを児童が発表する時間や動画で自分や友達の様子を見る時間を設定する。
・国語科以外の場面でも「伝わった」と実感できるような場の設定

中学部　国語科

【主な実態】

・教師や友達との関わりを好んでいる。
・言葉で自分なりのコミュニケーションをとる。
・学習場面で自分の意見を伝えるようになってきた。
・伝える、伝わる経験の不足
・相手に伝わるように話すことに課題がある。（語彙、言葉遣い、順序など）
・相手の話を聞く態度に課題がある。
・公の場で自信をもって、はきはきと話すことが難しい

【主体的に学ぶ姿】

・教師や友達の話に反応する。（表情、視線、うなずき、発声・発言、質問、模倣など）
・学習に向かう態度が良い。（着席、正しい姿勢など）
・声色、表情が明るい。肯定的な発言が多い。
・「やりたい」「やってみよう」

【学びを実感、発揮する姿】

・評価してもらい、「僕（私）、できたんだ」と実感
・時、場所、人が変わっても発揮できる。

【大切にしたいこと】

・環境づくり（安心感、発表できる雰囲気づくり、教材）
　→何のために工夫しているのか根拠を明らかにする。（このような姿が見られるので、安心できるように、△△の教材を準備する等、自立活動の視点をふまえる）
・生徒の課題の分析
・「友達に伝わった」という経験ができる場面設定
・授業者、国語担当者以外の教師に認めてもらう場面の設定＜実感＞
・やったことや頑張ったことを視覚的に蓄積する。

高等部　国語科

【主な実態】

・いろいろなことに自信がないが、恐れずに発言することはできる。
・根拠、理由を述べずに発言することが多い。
・他者の話に反応することができる。
・語彙力が少ないため、伝わらないことからトラブルに発展することもある。
・敬語を適切に使えないときがある。
・頭の中を整理することが苦手で、言語化できない。

【主体的に学ぶ姿】

・失敗を恐れずに一人で挑戦する姿
・相手の意見を聞く、認める、受け入れる姿

【学びを実感、発揮する姿】

・目的や相手に応じて適切な言葉を吟味して選び、思いや考えを伝え合う姿
・地域に出る学習で、その場に応じた発言や振る舞いができる姿

【大切にしたいこと】

・積極的に発表できる環境づくり
・相手の意見を聞き、自分の考えと比較して考えることができる学習の設定
・ペア学習やグループ学習の設定
・国語科で学んだ知識や経験を、他教科・領域で生かすことができる機会の設定
・自分の思いを表現して、相手に伝わる機会を増やす。
・共通した身振りや手振りなどを増やして、相互に表現して伝わる経験を増やす。

小　学　部

小学部の研究について

１　研究主題

児童生徒が学びを発揮する姿を目指した授業づくり

～自立活動の視点をふまえた国語科の指導を通して～　（１年／３か年）

２　学部研究の重点

・単元や授業の立案の段階から自立活動の視点を十分にふまえ、単元や授業の目標と評価を明確にし、他の学習活動との効果的な関連を図りながら、単元づくりを積み重ねる。
・国語科の授業において児童が主体的に学ぶために、教材教具の工夫や手立ての在り方、ＩＣＴ機器の効果的な活用方法を明らかにし、その学びを発揮するための環境や学習活動の設定を検討する。

３　重点の設定理由

小学部では、昨年度まで算数科における授業づくりや単元づくりに取り組んできた。今年度は、昨年度コミュニケーション力に伸びが見られたことや、研究主題にもなっていることから、児童が学びを発揮する姿を目指した国語科における授業づくりに取り組んでいく。

昨年度の研究の課題から、国語科の学習は、自立活動と密接に関わっており、児童が学びを積み重ねていくために、単元題材立案の段階から自立活動の視点を十分にふまえることの必要性が挙げられた。また、昨年度の学部研究では、他の学習活動との効果的な関連や算数科以外での児童の頑張りに対する評価を学部全員で行うことで、学びの実感につながったという成果が挙げられた。このことから、１つ目の重点として、単元や授業の立案段階から自立活動の視点をふまえ、単元題材一覧表を活用して他の学習場面との効果的な関連を図ることが大切であると考えた。

さらに、主体的に学ぶためには児童が楽しく学ぶことのできる教材や学習活動の工夫が必要である。昨年度も教材教具やＩＣＴの活用方法を何度も検討したことで、課題を解決するために必要な教具や学びの実感につながるＩＣＴの活用などを明らかにすることができ、児童が主体的に学ぶ姿が見られた。このことから、２つ目の重点を立案した。

４　研究仮説

国語科を対象教科とし、単元づくりでは、単元立案の段階から自立活動の視点をふまえ、児童が他の場面で学びを発揮する姿を目指して他の学習場面や日常生活と関連付けていく。授業づくりでは、要点を絞った授業改善や具体的で有効な手立ての検討を積み重ねていく。これらの実践を積み重ねていくことで、単元や授業の質が向上し、児童が主体的に学習活動に取り組むとともに、学びを実感し身に付けた学びを他の学習場面や日常生活の中で発揮しようとする姿が見られるだろう。

５　研究内容・方法

（１）児童が学習を積み重ね、その学びを発揮する単元づくり

①児童の丁寧な実態把握とその実態の共有
- 学習指導要領に基づいた実態把握
- 実態の定期的な見直しと共有

②児童が学びを生かすことができる単元の立案
- 年間を見通せる単元題材一覧表の作成
- 他の学習との効果的な関連や学びの実感、発揮する場の見える化

③自立活動の視点をふまえた単元づくり
- 学部内で情報を共有した上での自立活動実態シートの検討と作成
- 児童の自立活動の目標の共有

④学部職員全員での単元題材の検討と改善の積み重ね
・単元の目標や内容の検討と精選
・単元の改善の流れ、積み重ねの見える化

（２）児童の学びの実感につながる一単位時間の授業づくり

①要点を絞った一単位時間の授業づくり
・要点を絞った授業改善の積み重ねと、有効な方法や手立ての具体化
・他の学習グループの授業について知る・考える機会の設定

②ＩＣＴ機器の活用と改善
・活用のねらいの明確化
・活用方法の改善の積み重ね

６　小学部研究計画

月	主な内容
４月	**【研究日】** ・小学部研究の方向性の確認 ・ＩＣＴミニ研修（電子黒板） **【単元・題材検討日①】** ・わいわいプロジェクトと各教科間のつながり
５月	**【研究日】** ・実態把握（学習指導要領の指導内容確認表を基に） ・「主体的に学ぶ姿」「学びを実感する姿」の確認 ・国語科で大切にしたい点の検討 ・ＩＣＴミニ研修 **【単元・題材検討日②】** ・国語科の年間指導計画とわいわいプロジェクト、教科間のつながり
６月	**【研究日】** ・自立活動の流れ図を検討・作成 ・単元づくり、単元検討 ・ＩＣＴミニ研修（実物投影機）
７月	**【研究日】** ・年間指導計画検討、単元検討（単元目標、単元名、単元計画） ・小単元検討（小単元目標、小単元名、小単元計画） ・授業検討（本時の目標、内容、教材、ＩＣＴ活用） ・ＩＣＴミニ研修（ｉＰａｄ機能の確認） **【単元・題材検討日③】** ・国語科の年間指導計画の見直しとわいわいプロジェクト、教科間のつながり **【教材展示会】** ・国語科、算数科の教材展示会
８月	**【研究日】** ・授業検討（内容、教材、グループ活動、有効な手立て） ・自立活動実態シートを活用した個別の手立ての検討 ・ＩＣＴミニ研修（各種アプリ）
９月	**【研究日】** ・全校授業研究会に向けて ・ＩＣＴミニ研修（各種アプリ） **【全校授業研究会】** ・全校授業研究会授業提示、研究会

	【単元・題材検討日④】 ・前期までのわいわいプロジェクト、各教科の取組の確認と共有
１０月	**【研究日】** ・全校授業研究会授業を終えて ・ＩＣＴミニ研修（各種アプリ）
１１月	**【研究日】** ・全校研究のグループ以外の単元・授業づくりについて成果と課題 ・ＩＣＴミニ研修（各種アプリ）
１２月	**【研究日】** ・学部研究の成果と課題について ・ＩＣＴミニ研修（各種アプリ）
１月	**【研究日】** ・学部研究のまとめ（成果と課題）
２月	**【単元・題材検討日⑤】** ・今年度の振り返り
３月	**【研究日】** ・次年度の研究に向けて

7　研究の実際

（１）児童が学習を積み重ね、その学びを発揮する単元づくり

①児童の丁寧な実態把握とその実態の共有

・学習指導要領に基づいた実態把握

・実態の定期的な見直しと共有

学習指導要領の指導内容確認表（熊本大学教育学部附属特別支援学校）を基に、国語科の各学習グループで実態把握を行った。（図１）指導内容確認表を用いることで、学習指導要領を基にして児童の得意とする内容や課題がある内容を明らかにすることができた。

【図１：指導内容確認表（一部）】

＜成果：〇　課題：△＞

〇指導内容確認表を基に、児童の得意とする内容や課題がある内容を明らかにして、具体的に実態把握をすることができた。

〇５月の実態把握では概ねできている（〇）と考えていた項目が、７月では課題がある（△）に変わり、実態の見直しを図ることができた。国語科２グループでは、「言葉を聞いてその動きを表現すること」に課題があることが分かり、実際に体験しながら言葉を学ぶことができるように学習内容を見直した。

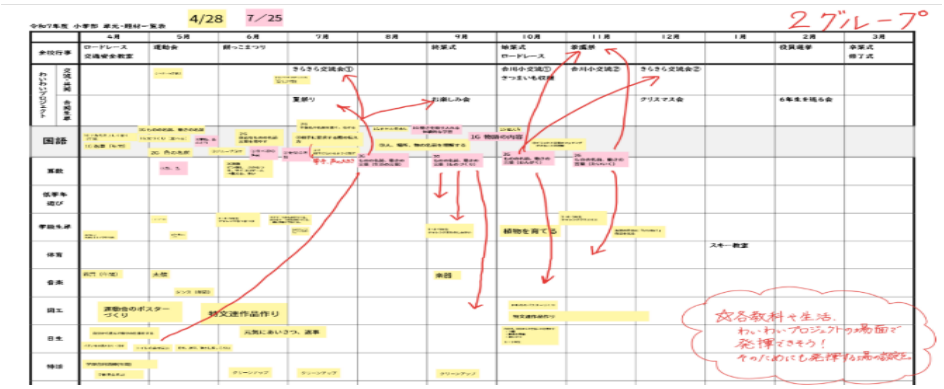
△学習グループの中でも実態差があるため、さらに細かく実態把握をしていく必要がある。自立活動の視点とも密接に関わっていくため、自立活動の視点をふまえた実態把握と一緒に行う必要がある。

②児童が学びを生かすことができる単元題材の立案

・年間を見通せる単元題材一覧表の作成

・他の学習との効果的な関連や学びの実感、発揮する場の見える化

年間の学習活動とその内容を単元題材一覧表にまとめ、国語科と他の学習との関連を図り、どの場面で児童が学びを発揮することができるのかを検討した。（図２）国語科での学びは、日常生活や他の学習の様々な場面で発揮することができるが、関連する学習の中でも意図的に発揮する場を設定することが大切であると考えた。国語科の学習グループごとに年間単元一覧表を作成し、学部集会やわいわいプロジェクト（小学部合同で行っている地域と関わる学習）などでの学びの発揮について検討した。



【図２：単元題材一覧表】

学習グループごとに、国語科で学んだ学習内容をどの場面でどのように発揮したのかが分かるように児童生徒の学びを発揮した場面のエピソード記録をまとめた。（図３）

学びの発揮・エピソード記録

国語で学んだ内容	その他の学習・生活での学び	学びを発揮した場面	児童の様子
・話す、伝える	・振り返り場面 ・朝の会の司会	・お楽しみ会	＜学習前＞ ・人前で話すことに抵抗感があり、話す内容と言葉が一致していないことが多かった。 ＜学習後＞ ・感想発表の際、教師が側にいなくてもみんなに聞こえる声で「3・4・5年生の玉入れゲームを頑張りました。」と友達に伝わる文章で話すことができた。
・「めざせ！ことばマスター～ものづくりのことば～」 ・ものづくりに関する動きの言葉を学習した。 「こねる」		・遊び 紙粘土での制作	＜学習前＞ ・作った物を教師に見せるだけで、どうやって作ったかを伝えることが難しかった。 ＜学習後＞ ・「『こねる』やった！」と国語で学習した言葉を使って教師に話すようになった。

【図３　学びの発揮・エピソード記録（２グループ）一部抜粋】

＜成果：○　課題：△＞

○国語科で学習した言葉を使った学習内容を設定し、国語科での学びに加え、その他の学習や生活でも繰り返し学習をしたことで、自分から学習した言葉を使って話す姿や相手に伝わる文章で話す姿など、児童の姿に変容が見られた。

○児童の様子や変容について全職員で共有し、記録したことで、国語科のグループだけでは見えなかった姿を様々な視点から具体的に見取ることができた。それを基に、学習内容の見直しを図ることができた。

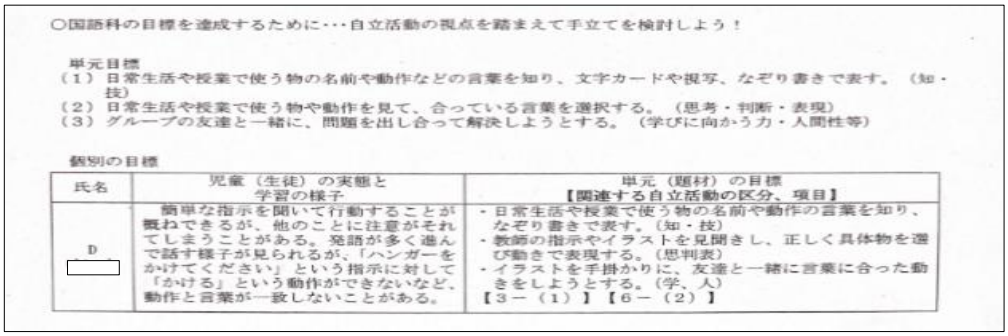
△国語科での学びを発揮する場面を検討したが、生活場面や他の学習場面で広がった言葉や学びを国語科で取り上げて双方向に学習を深めていく必要がある。

③自立活動の視点をふまえた単元づくり

・学部内で情報を共有した上での自立活動実態シートの検討と作成

・児童の自立活動の目標の共有

単元や個別の目標（図４）と自立活動実態シート（図５）を照らし合わせ、国語科と自立活動の視点の関連を検討した。児童の学習の様子と自立活動の区分で整理した実態から、国語科の授業において必要な個別の手立てを考える指標となった。国語科２グループでは、全体として集中力が途切れやすいという課題が明らかになり、動きのある学習を取り入れ、メリハリを付けることが必要であると考えた。（表１、２）



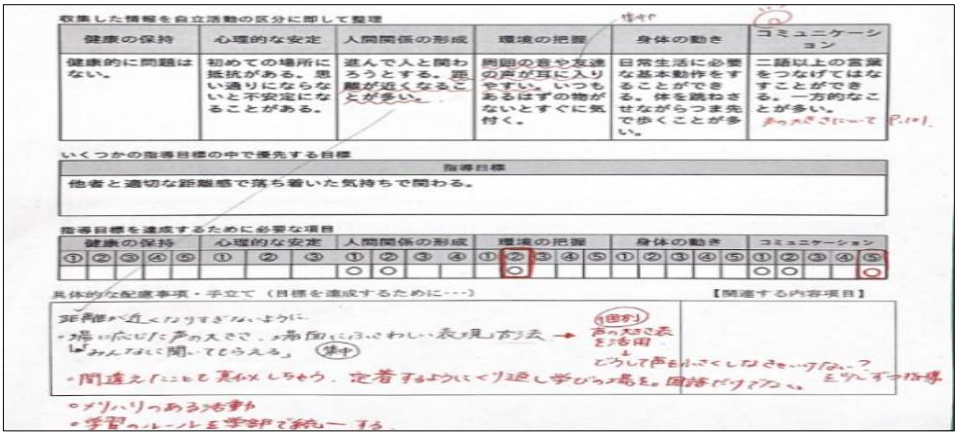
○国語科の目標を達成するために･･･自立活動の視点を踏まえて手立てを検討しよう！

単元目標
（1）日常生活や授業で使う物の名前や動作などの言葉を知り、文字カードや模写、なぞり書きで表す。（知・技）
（2）日常生活や授業で使う物や動作を見て、合っている言葉を選択する。（思考・判断・表現）
（3）グループの友達と一緒に、問題を出し合って解決しようとする。（学びに向かう力・人間性等）

個別の目標

氏名	児童（生徒）の実態と学習の様子	単元（題材）の目標【関連する自立活動の区分、項目】
D	簡単な指示を聞いて行動することが概ねできるが、他のことに注意がそれてしまうことがある。発語が多く進んで話す様子が見られるが、「ハンガーをかけてください」という指示に対して「かける」という動作ができないなど、動作と言葉が一致しないことがある。	・日常生活や授業で使う物の名前や動作の言葉を知り、なぞり書きで表す。（知・技） ・教師の指示やイラストを見聞きし、正しく具体物を選び動きで表現する。（思判表） ・イラストを手掛かりに、友達と一緒に言葉に合った動きをしようとする。（学、人） 【3－（1）】【6－（2）】

【図４　単元目標】



収集した情報を自立活動の区分に即して整理

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
健康的に問題はない。	初めての場所に抵抗がある。思い通りにならないと不安定になることがある。	進んで人と関わろうとする。距離が近くなることが多い。	周囲の音や友達の声が耳に入りやすい。いつもあるはずの物がないとすぐに気付く。	日常生活に必要な基本動作をすることができる。体を跳ねさせながらつま先で歩くことが多い。	二語以上の言葉をつなげてはなすことができる。一方的なことが多い。

いくつかの指導目標の中で優先する目標

指導目標
他者と適切な距離感で落ち着いた気持ちで関わる。

指導目標を達成するために必要な項目

健康の保持					心理的な安定			人間関係の形成				環境の把握					身体の動き					コミュニケーション				
①	②	③	④	⑤	①	②	③	①	②	③	④	①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤
								○	○				○									○	○			○

具体的な配慮事項・手立て（目標を達成するために…）　【関連する内容項目】

距離が近くなりすぎないように
・場に応じた声の大きさ、場面にふさわしい表現方法 → 個別 声の大きさ表を活用 → どうして声を小さくしなきゃいけないか？ を少しずつ指導
「みんなに聞いてもらえる」 集中
・間違えたことも真似しちゃう。定着するようにくり返し学びの場を。国語だけでない。
・メリハリのある活動
・学習のルールを学部で統一する。

【図５　自立活動実態シート】

国語科２グループの課題		
自立活動の視点	手立て	実際の取組
＜心理的な安定＞ ・疲れたときや活動に興味がないときに、活動から外れようとする。 ・話を集中して聞くことが難しい。	・学習に空き時間がないように、活動内容を見直し、メリハリをつけて、動きのある学習を取り入れる。	・本時で学習する言葉に合った動きを全員で行う。 →○粘土を触って体験する時間とカードで言葉の意味を学習する時間を設定したことで、メリハリがつき、目の前の学習に集中して取り組むことができた。 【写真１　展開場面の様子】

【表１　自立活動の視点をふまえたグループの課題】

個別の課題		
自立活動の視点	手立て	実際の取組
＜コミュニケーション＞ ・話すことは好きだが、会話が一方的になる時がある。 ・話したい、書きたいという気持ちから、活動の切り替えが難しい。	・空き時間がなく、飽きないように、意図的に話す場面、活躍する場面を設定する。	・グループ活動のときに、言葉に合った動きをしてグループの友達に問題を出す。 →○活動に飽きることなく、主体的に学習に取り組もうとする姿が見られた。 【写真２　展開場面の様子】

【表２　自立活動の視点をふまえた個別の課題（一部）】

＜成果：○　課題：△＞

○自立活動実態シートを活用して一人一人の自立活動の配慮事項や手立てを考えたことで、グループ全体の課題や個別の課題が明らかになり、具体的な手立てを導き出すことができた。

△前年度の反省を受けてシートの作成はほとんどできていたが、検討は国語科２グループの実態把握に偏ってしまった。今年度の実態シートを活用しながら年度初めに自立活動実態シートを作成し、検討することが必要であると考える。

△国語科だけでなく、他の学習にも自立活動の視点を取り入れていくことができるように検討が必要である。

④学部職員全員での単元題材の検討と改善の積み重ね

・単元の目標や内容の検討と精選

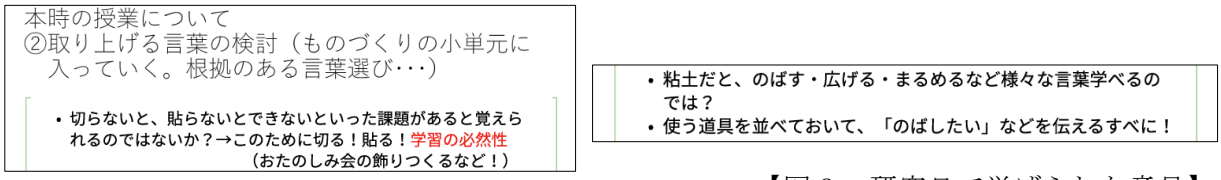
・単元の改善の流れ、積み重ねの見える化

ア　単元のアイディア

単元について学部全員で検討した。学部で大切にしたいこととして、児童が楽しんで主体的に取り組むことや、経験を通して言葉を身に付けることが挙げられた。そのことから、日常生活や学習の中で取り扱う言葉を選定し、実際に経験しながら言葉を身に付けられる学習活動を検討した。

・根拠のある言葉選び

図工の学習や遊びの指導、生活単元学習で粘土を使った学習をすることから、「ものづくり」の言葉の中でもその言葉を国語科の学習で取り上げるかを検討した。（図６）初めは、物の名前と物を使った動作の言葉を取り上げて学習することとしていたが、物の名前を限定すると動作の言葉も限定されてしまうことから、動作の言葉を学習する中で、物の名前にも触れていくこととした。また、粘土を使った学習では、一つの材料で実際に作りながら様々な動作の言葉を学ぶことができるという意見が挙げられた。実際にグループの教員で粘土を使って教材研究を行い、今後の図工の学習や遊びの指導、生活単元学習につながる言葉と動作について検討をした。さらに、教科書☆「がっこうだいすき」では、ものづくりに関する言葉が取り上げられており、星本を参考にした言葉の選定についても検討した。



【図６　研究日で挙げられた意見】

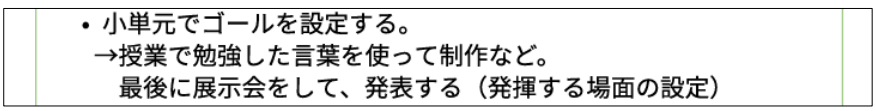
＜成果：○　課題：△＞

○生活で用いる言葉を国語科で学習したことで、毎日の朝の活動や生活の中で繰り返し出てくる言葉と学んだ内容がつながり、自分から学んだ言葉を用いて話すことができるようになった。

△取り上げる言葉の検討はしたが、その言葉にはどんな意味があり、どのような場面で使うことができるのかという検討はできなかった。例えば、「のばす」という言葉は、横に引っ張ることや平らにつぶすことのどちらにも使うことができ、一つの言葉に多様な意がある。学習した言葉をどの場面でどのように使うのかをあらかじめ想像して言葉の選別をする必要がある。そうすることで、学習する言葉の意味の深め方や多様に使えることをどのようにまとめるかなど、学習する必然性をさらに明確にすることができると考える。

・学びの定着や発揮につながるゴール設定

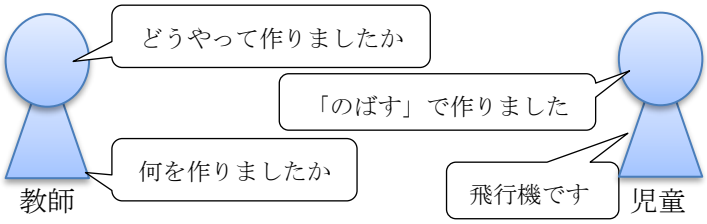
国語科２グループでは、「せいかつのことば」や「ものづくりのことば」など、小単元に分けて様々な言葉を学習するため、まずは小単元の中で学びの定着を図ることが大切であると考えた。



【図７　研究日で挙げられた意見】

学んだ言葉を自分から使うことで学びの定着につながるため、小単元の中にゴールを設定し、学習した動作の言葉を使って取り組む課題や発表場面を設定した。「ものづくりのことば」の小単元では、最後に「のばす」「おす」などの学習した言葉を使って粘土で好きな物を作り、どうやって作ったのかを発表する場面を設定した。（写真３、図８）発表では、教師とのやり取りを通して、「どうやって」、「何を」作ったのかを発表した。

【写真３　児童が作った作品】



【図８　発表したときの様子】

＜成果：○　課題：△＞

○学習した言葉について、実際の動きを取り入れながら体験的に学ぶことができた。そのことで、言葉とその意味の定着を図ることができ、児童の学びの実感につながった。

△「のばす」「おす」などの言葉を「のばして」「おして」などの話し言葉に変換して伝える学習まで広げることができなかった。より豊かな表現で伝えられるように、学習した言葉の発揮場面を広げていく必要がある。

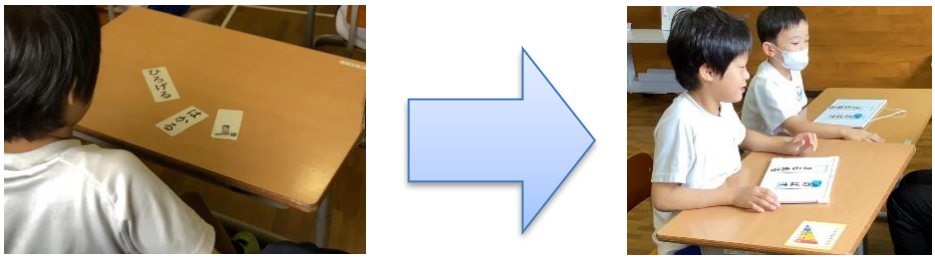
イ　教材

国語科２グループでは、動きや物とその言葉を一致させる学習として、動きや物を見て言葉カードで答える学習を取り入れている。なぜ言葉カードを使用するかというと、文字は読めているが発声で答えることが難しい児童もいるためである。一方で、話すことはできるが文字の読みが難しい児童もいるため、その児童にはカードの裏にヒントとしてイラストを入れ、イラストを見ることで言葉カードで答えることができるようにした。動きや物とその言葉の一致に重点を置き、全員が参加できるように教材を工夫した。【写真４】

表　　裏

【写真４　文字カード】

また、自立活動実態シートで実態把握を行った際に、手元のカードで遊んでしまう児童が多いことが分かり、環境の把握の視点からホワイトボードにカードを貼り付けて、当てはまる言葉に磁石を置いて解答するように変更した。【写真５、６】



【写真５　文字カードでの学習（改善前）】　　【写真６　文字カードでの学習（改善後）】

＜成果：○　課題：△＞

○裏にイラストがあることで、文字の読みが苦手な児童もその言葉を話しながら自信をもって言葉カードで答えることができた。

○ホワイトボードに貼り付けて磁石を置いて解答する形にしたことで、カードで遊ぶことが減り、言葉を選択することに意識を向けることができた。

△文字カードで答えることが簡単な児童もおり、平仮名を並べ替えて、動きに会った言葉を作るなど、実態に合った教材の工夫が必要である。

（２）児童が主体的に学び、その学びを実感できる手立ての検討と実践

①要点を絞った一単位時間の授業づくり

・要点に絞った授業改善の積み重ねと、有効な方法や手立ての具体化

全校授業研究会に向け、７月に学部で事前授業研究会を行った。事前授業研究会では、以下の成果と課題があった。（表３）自立活動の視点をふまえて、支援や手立てを改善した。

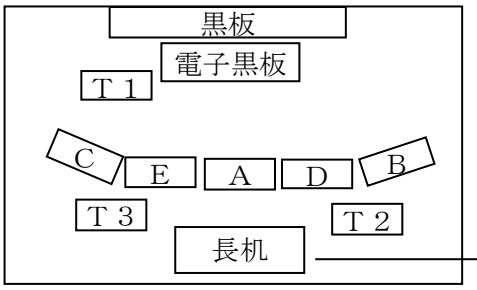
【写真７　事前授業研究会における事後研究会の様子】

	事前授業研究会７月１７日	○成果　△課題　自立活動の視点
導入	○呼名と返事 ○日付と曜日の確認 ○本時の流れの確認 ○めあての確認 「『たたむ』『ひろげる』『はかる』をうごいてみよう。」（せいかつのことば）	△めあての設定 →児童が何を達成したらよいかが分かりやすいめあての設定が必要。グループの活動内容の変更に合わせて、めあても達成すべきポイントが分かりやすいように改善した。 →「うごきにあったことばをえらぼう」
展開	○前時までの学習の振り返り ○「たたむ」「ひろげる」「はかる」の言葉とその動きの確認 ○グループ活動 ・２つのグループに分かれて、教師が言葉カードを提示し、その言葉に合った動作をする。 ○動画で振り返り	○写真や動画を見ることで、動作とその言葉に注目していた。 △環境設定（改善案①：環境の把握） →場面に合わせて必要な物を使うことができるような環境設定について検討した。 △グループ活動 （改善案②：コミュニケーション） →対話的な学びにつなげるための活動内容やグループの形、位置を児童の実態をふまえて再検討した。 ○動画での振り返りが分かりやすく、児童が注目していた。
まとめ	○学習した言葉の視写やなぞり書き ○単元表で振り返り ・本時の学習に花丸を付ける。	△書く活動の必要性 （改善案③：心理的な安定） →単元における書く活動の時間や意欲的に取り組めるような工夫について検討した。
Ｔ２ Ｔ３ の役割	○児童の補助、 言葉カードでの問題提示	→振り返りのための写真、動画撮影 →児童の実態に応じた支援 例）・声量の調整が難しい児童に対して、声の大きさ表で声の大きさをその都度確認する。（コミュニケーション）

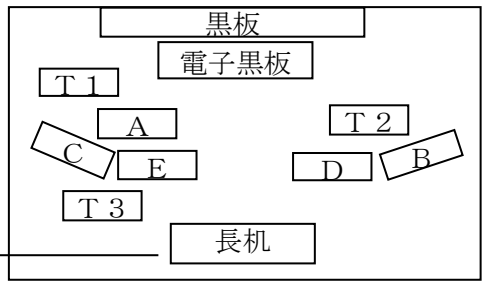
【表３　７月１７日事前授業研究会】

【改善①　環境設定（環境の把握）】

児童が目の前の活動に集中して取り組むことができるように、机上の整理や環境設定について検討した。特に、環境設定については、話を聞く場面（写真８）と体験する場面（写真９）、グループ活動の場面（写真１０）に合わせて活動場所を変えるといったように、活動に動きをもたせながら何をするかが明確となる環境設定を行った。



【図９　話を聞く場面】



【図１０　グループ活動】

教室の後方に長机を設置し、その上に粘土を置く。全員で動作を体験する際に長机に移動することで、目の前の活動に集中することができると考えた。

【写真８　話を聞く場面】

【写真９　動きを体験する場面】

【写真１０　グループ活動の場面】

＜成果：○　課題：△＞

○活動にメリハリがついたことで、話に集中することができるようになった。

△長机に向かって立って活動をしたことで、落ち着かずに歩き回る児童もいた。場所を変えても座って活動することができるように、実態に合わせて机と椅子を用意するといった工夫が必要である。

【改善②　グループ活動（コミュニケーション）】

事前授業研究会では、教師が言葉カードを用いて問題を出し、出された言葉にあった動きをするという内容であった。（写真１１）グループの児童が全員で一斉に行うため、一度取り組んだ児童が何をすればよいか分からず、時間を持て余してしまうことがあった。改善後は、発表者が言葉にあった動きをしてグループの児童が答えるという活動で、動きを入れてゲーム性のある活動を取り入れることとした。（写真１２）

【写真１１　グループ活動（改善前）】

【写真１２　グループ活動（改善後）】

＜成果：○　課題：△＞

○グループでの活動が苦手な児童もいたが、毎時間グループ活動を取り入れて学習をしたことで、他教科においてもグループ活動をすることができるようになった。

○ゲーム性のある活動を取り入れたことで、児童同士での関わりが増え、発表をする児童も答える児童も達成感を感じられる活動になった。

【改善③　書く活動の必要性（心理的な安定）】

国語科２グループでは、昨年度から書く活動を続けており、書くことで文字の字数とその文字の読みを対応させることや、文字への興味や読むことへの自信につながっていた。そのため、今後も書く活動を取り入れていくが、本単元では体験を通して言葉とその動作を理解することを重視しているため、書く活動を毎時間取り入れるのは活動量が多く難しかった。そのことから、書く活動の位置付けについて検討し、毎時間書く活動を取り入れるのではなく、言葉の意味を理解してから小単元の最後に取り入れることとした。

めざせ！ことばマスター ～ものづくりのことば～
・ものづくりに関する言葉を知る。（１～６時間） ・学習した言葉についてなぞり書き や視写をする。　　（７・８時間） ・学習した言葉を使って制作する。

・発表の前に学習した言葉を振り返る時間として、書く活動を設定した。
○ゆっくり丁寧に書こうとする児童の姿が見られた。教師側も一人一人に丁寧な書き方指導をすることができた。

ものづくりに関する言葉を知る学習では、書く活動をなくした分、「ものづくりタイム」としてその時間に学習した言葉を用いて粘土で制作をする時間を設定した。毎時間のまとめとして、学習した言葉を使って制作する活動を入れることで、より確実な言葉の定着につながると考えた。（写真１３）

「まるめる」と「のばす」を使って、お団子とへびを作りましょう。

・教師のまねをして伸ばしたり丸めたりしていた。野球のバッドを作り、好きな野球選手の名前を話す姿が見られた。

【写真１３　ものづくりタイムの様子】

＜成果：○　課題：△＞

○実際に制作することで、楽しみながら学習した言葉を話したり、好きな物を作ったりと主体的に活動する様子が見られた。

△児童が作った物に対して、「○○を作ったんだね」だけではなく、「どうやって作ったの？」などの問い掛けや答えることが難しい児童には「丸めて作ったんだね」や言葉カードでどうやって作ったかを選ばせるなど、教師からのフィードバックをたくさんすることが大切である。

△お題から離れて好きな物を作ってしまう児童もいたため、どの言葉の動作を使って何を作るのかということを明確に設定することが必要であった。「めざせ！ことばマスター」という単元名から、「マスター検定」と題して「雪だるまを作れるか」や教師が「まるめる」と言ったらその動作ができるのかなど、ただ作るだけにならないように、ものづくりタイムがめあてに対する見取りになるように活動を工夫する必要がある。

各グループの学びの実感につながる振り返りの検討と実践

国語科１～４グループで児童の実態に応じた振り返りに取り組んでいる。

各グループの国語科における振り返り	成果○　と　今後の取組☆
・個別の課題やグループでの活動の様子をｉＰａｄで撮影し、自分や友達の頑張りを映像で見て振り返る。 （国語科１・２・３グループ） ・学習したことやできたことを教師と一緒に確認して振り返る。 （国語科４グループ）	○自分の様子を客観的に見ることができ、「やったー！」と達成感につながっている。 ○称賛されることで学びを実感し、学びの定着につながっている。 ☆振り返りで何を頑張ったのかが分かるように、頑張ることが分かるめあての提示をする。 ☆学習した言葉をアウトプットできるように、実態に合わせて確認問題に挑戦する。

②ＩＣＴ機器の活用と改善

・活用のねらいの明確化

・活用方法の改善の積み重ね

国語科２グループの本単元では、児童が実際に動作を体験し、対話を通して言葉を学んでいくということを重視している。ｉＰａｄは、導入場面や振り返りの場面で教師が活用することとした。（写真１４）また、グループ活動で正解発表の場面でドラムロールを流すなど、児童がグループ活動に意欲的に取り組むことができるようにスイッチ教材を活用することとした。（写真１５）

【写真１４　ｉＰａｄの活用】

【写真１５　スイッチ教材の活用】

＜成果：○　課題：△＞

○導入場面でＩＣＴを活用してミッションを提示したことで、児童が主体的に学習に取り組む姿が見られた。振り返り場面では、児童の活動の様子を撮影したものを電子黒板に映しながら教師がよい点を児童に伝えることで、「やったー！」と喜び、学びを実感する姿が見られた。

△自立活動の視点から個別のＩＣＴ機器の活用について検討する必要があった。児童の実態や困難さに対して「このようにＩＣＴ機器を活用できるのではないか」と検討できるように、学部職員全員でＩＣＴ機器の活用方法を共有し、学ぶ機会を設ける必要がある。

例）

自立活動の視点
＜コミュニケーション＞ ・簡単な単語で伝えることはあるが、正しい発声で伝えることは難しい。

伝えるための支援として･･･

・言葉を相手に伝える機会として、ロイロノートの読み上げ機能を活用する。

各グループにおける児童の実態に応じたＩＣＴ機器の活用

国語科１～４グループで児童の実態に応じたＩＣＴ機器の活用に取り組んでいる。

ＩＣＴ機器の活用方法	成果○　と　今後の取組☆
国語科１グループ ・ロイロノートのカードを並び替えて、文を作る学習 ・平仮名アプリでの書く学習 国語科３グループ ・色の学習の際に、教師と一緒に児童がｉＰａｄの画面に描かれたイラストに色を塗る。 国語科４グループ ・色塗りやクイズ問題に取り組む。 ・児童の発声の様子を録画して振り返る。	○児童の実態に応じて、平仮名アプリやロイロノートなど、ｉＰａｄのアプリを活用することができた。 ○全体的に児童が意欲的に取り組むことにつながった。プリントよりも興味を示す児童が多い。 ○やり直しができるため、何度も挑戦することができる。 ☆ｉＰａｄよりもプリントに書く方が好きな児童もいるため、児童がやりやすく、やりたい教材を選ぶことができるように選択肢を用意することが大切である。

８　成果と課題のまとめ

成　果

・指導内容確認表を基に、全職員で丁寧に実態把握を行ったことで、児童の実態に合わせて課題と見られる内容を取り入れながら単元を立案することができた。
・児童の様子や変容について全職員で共有し、記録したことで、国語科の学習グループ担当者だけでは見えなかった姿を様々な視点から具体的に見取ることができた。
・自立活動実態シートを活用して一人一人の自立活動の配慮事項や手立てを考えたことで、学習グループ全体の課題や個別の課題が明らかになり、具体的な手立てを導き出すことができた。
・繰り返し体験的に言葉を学習することができたことで、学びの実感につながり、言葉の定着を図ることができた。

課　題

・学習グループの中でも実態差があることから、指導内容実態表の項目を細分化してより具体的に実態把握をしていくことが必要である。自立活動の視点とも密接に関わることから、自立活動実態シートを年度初めに作成・検討し、自立活動の視点をふまえた実態把握も一緒に行う必要がある。
・国語科での学びを発揮する場面を検討したが、生活場面や他の学習で広がった言葉や学びを国語科で取り上げて双方向に学習を深めていく必要がある。
・取り上げる言葉の検討はしたものの、その言葉にはどんな意味があり、どのような場面で使うことができるのかという検討ができなかった。学習した言葉をどの場面でどのように使うのかをあらかじめ想像して言葉の選定をする必要があった。
・児童が学びを実感し、めあてに対するまとめや振り返りとなるように、検討をしていく必要がある。国語科２グループのみの検討が多くなってしまったことから、全グループの授業を見合う時間を十分に確保し、取り組みを共有する時間を設定していきたい。
・職員全員でＩＣＴ機器の活用方法について情報共有を密に行い、児童の実態や困難さに応じてＩＣＴ機器を活用できるかどうかを検討していくことが大切である。引き続き、職員全員でＩＣＴ機器の活用方法を学ぶ機会を設けていきたい。そうすることで、児童がＩＣＴ機器とアナログ教材のどちらも使うことができるように選択肢を提示することができると考える。

中　学　部

中学部の研究について

１　研究主題　　生徒が学びを発揮する姿を目指した授業づくり
～自立活動の視点をふまえた国語科の指導を通して～

２　学部研究の重点

・国語科に焦点を当て、単元題材立案の段階から自立活動の視点を十分にふまえ、単元や授業の目標と評価を明確にし、他の学習活動との効果的な関連を図りながら、単元づくりを積み重ねる。
・授業改善を積み重ねる中で、生徒が主体的に学び、その学びを発揮するための学習活動や手立ての在り方、ＩＣＴ機器の活用方法を明らかにする。

３　重点の設定理由

昨年度中学部は生徒が主体的に学び、その学びを実感する授業づくりとして、国語科の単元、授業づくりに取り組んだ。生徒の実態を丁寧に把握し、それをふまえて単元の立案、めあての表現、小単元の設定の工夫につながった。また、一単位時間の授業づくりでは、生徒が学びを実感するためのめあて、まとめ、振り返りの在り方、ＩＣＴ機器の効果的な活用方法について検討することができた。だが、国語科での学びを別の場面で発揮することに課題が残った。学びを発揮するためには、生徒の学習への意欲、十分な理解や定着、学んできたことへの自信が必要だと考える。また、国語科の学習は、自立活動と密接に関わっており、生徒が学びを積み重ねていくために、単元題材立案の段階から自立活動の視点を十分にふまえることの必要性が挙げられた。

そこで昨年度までの成果と課題を受けて、学部研究の重点を上記の二点とした。自立活動の視点から生徒の実態を把握し、単元や授業の目標と評価を明確にし、学習内容を検討する。さらに他の学習活動や日常生活との関連を検討しながら単元題材づくりを積み重ねることで、生徒の主体的な学びや学びの実感につなげることができると考える。また、国語科の授業において学習活動やめあて、振り返りや手立ての在り方について、自立活動の視点をふまえた実態から検討することで、生徒が主体的に学び、自身の学びを実感することができると考え、重点を設定した。

４　研究仮説

国語科を対象教科とし、単元づくりでは、単元立案の段階から自立活動の視点をふまえ、生徒が他の場面で学びを発揮する姿を目指して他の学習場面や日常生活と関連付けていく。授業づくりでは、要点を絞った授業改善や具体的で有効な手立ての検討を積み重ねていく。これらの実践を積み重ねていくことで、単元や授業の質が向上し、生徒が主体的に学習活動に取り組むとともに、学びを実感し身に付けた学びを他の学習場面や日常生活の中で発揮しようとする姿が見られるだろう。

５　研究内容・方法

（１）生徒が学習を積み重ね、その学びを発揮する単元づくり

① 生徒の丁寧な実態把握とその実態の共有
・国語科学習指導要領に基づいた実態把握
・実態の定期的な見直しと共有

②生徒が学びを生かすことができる単元の立案
・年間を見通せる単元題材一覧表の作成
・他の学習との効果的な関連や学びの実感、発揮する場の見える化

③自立活動の視点をふまえた単元づくり
・学部内で情報を共有した上での自立活動実態シートの検討と作成
・生徒の自立活動の目標、変容の共有、エピソード記録の蓄積

④学部職員全員での単元題材の検討と改善の積み重ね
・単元の目標や内容の検討と精選
・単元の改善の流れ、積み重ねの見える化

（２）生徒の学びの実感につながる一単位時間の授業づくり

①要点を絞った一単位時間の授業づくり
・自立活動の視点をふまえた手立ての検討
・要点に絞った授業改善の積み重ねと、有効な方法や手立ての具体化
・他の学習グループの授業について知る・考える機会の設定

②ＩＣＴ機器の活用と改善
・活用のねらいの明確化
・活用方法の改善の積み重ね

６　中学部研究計画

月	主な内容
４月	**【研究日】** ・中学部研究の方向性の確認 **【単元・題材検討日①】** ・単元題材一覧表の作成
５月	**【単元・題材検討日②】** ・みんなのためにプロジェクトの確認 ・国語科で大切にしたい点の検討 ・国語科の年間指導計画の検討 **【研究日】** ・国語科で目指す「主体的に学ぶ姿」「学びを実感する姿」の検討 ・自立活動実態シートの作成
６月	**【研究日】** ・自立活動実態シートの作成 ・国語科で大切にしたい点、国語科で目指す「主体的に学ぶ姿」「学びを実感する姿」の確認 ・各グループの実態把握（指導内容確認表／熊本大学教育学部附属特別支援学校を基に）
７月	**【研究日】** ・自立活動実態シートの作成 ・生徒の実態把握の共有 ・対象グループの単元・題材構想の検討（単元題材構想シートを用いて） **【単元・題材検討日③】** ・国語科各グループの取組の振り返りと年間指導計画の見直し、共有 ・単元題材一覧表の見直し ・対象グループの単元・題材構想の検討（単元題材構想シートを用いて） **【中学部教材展示会】** ・国語科、数学科の教材展示
８月	**【研究日】** ・対象グループの単元・題材構想の検討（単元題材構想シートを用いて） ・指導案検討①（単元の検討）
９月	**【研究日】** ・中学部で大切にしたい点の確認、修正 ・エピソード記録の共有 ・指導案検討②（本時の検討）

	・ＩＣＴミニ研修（Ｃｈａｔ　ＧＰＴについて） **【単元・題材検討日④】** ・第１回全校授業研究会の振り返り ・前期までのみんなのためにプロジェクトと各教科の成果と課題の共有 ・指導案検討③（手立ての検討～自立活動の視点から～）
１０月	**【研究日、単元・題材検討日⑤】** ・後期のみんなのためにプロジェクトの検討と単元題材一覧表の修正 ・国語科と他の学習との関連の検討・確認 ・実態把握の見直し（国語科全グループ） **【事前授業研究会】** ・事前授業研究会授業提示、研究会
１１月	**【研究日】** ・全校授業研究会に向けた取組の確認 ・模擬授業 **【全校授業研究会】** ・全校授業研究会授業提示、研究会
１２月	**【研究日】** **・第２回全校授業研究会の振り返り** ・学部研究の成果と課題について ・ＩＣＴミニ研修
１月	**【研究日】** ・学部研究のまとめ（成果と課題）
２月	**【単元・題材検討日⑥】** ・今年度の振り返り
３月	**【研究日】** ・次年度の研究に向けて

７　研究の実際

（１）生徒が学習を積み重ね、その学びを発揮する単元づくり

①　生徒の丁寧な実態把握とその実態の共有

・国語科学習指導要領に基づいた実態把握

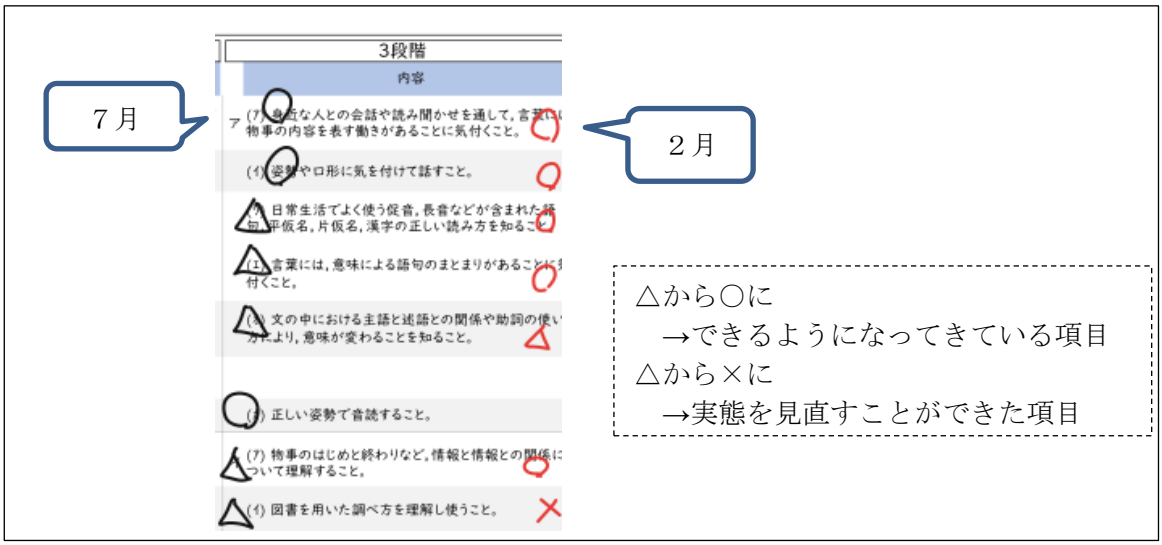
・実態の定期的な見直しと共有

学習指導要領の指導内容確認表（熊本大学教育学部附属特別支援学校）を基に、国語科の各グループで実態把握を行った。（図１）指導内容確認表を用いることで、学習指導要領を基にして生徒の得意とする内容や課題がある内容を明らかにすることができた。４～６月の国語科の授業での生徒の様子を踏まえて７月に実態把握を行い、学部職員間で共有した。また、９月の前期終了後にもう一度実態把握表を見直し、後期の単元づくりに生かした。

また１月・２月に指導内容確認表を見直し、各グループで生徒の変容を確認し、学部内で成果や変容を共有した。（図２）この指導内容確認表は来年度へ引き継ぐこととしている。

○：できる
△：グループ内で実態差がある
無記入、×：難しい

（図１：Ａグループ指導内容確認表【一部】）



（図２：Ｃグループ　７月、２月指導内容確認表【一部】）

＜成果：○　課題：△＞

○指導内容確認表が客観的な指標となり、国語科各グループの実態を把握することができた。どのような内容を扱うとよいかがわかり、単元・授業づくりに生かすことができた。

○単元実施後、前期終了後など定期的に実態を見直し、今後取り扱う単元づくりへ生かすことができた。また後期には指導内容確認表を用いて生徒の変容を確認することもできた。

△グループ内の生徒によって実態が異なることから「△：グループ内で実態差がある」と曖昧な判断基準になってしまった。生徒一人一人の実態把握を行うことでより丁寧な実態把握となる。

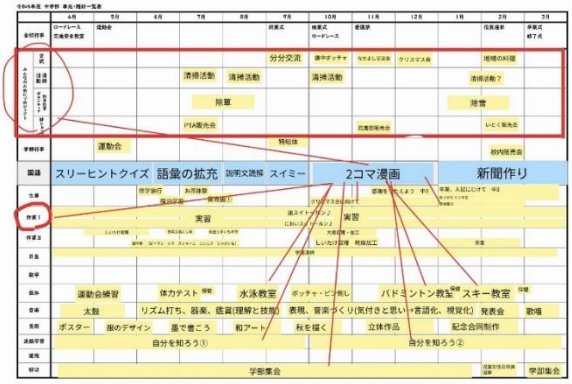
△今年度中学部は各グループＴ１のみで授業を行った。それにともなって実態把握もＴ１のみで行ったが、生徒の実態の捉え方に偏りが生じることから、複数の職員で実態把握をするべきであった。

②　年間単元一覧表の作成と活用

・年間を見通せる単元題材一覧表の作成

・他の学習との効果的な関連や学びの実感、発揮する場の見える化

年間の学習活動とその内容を単元題材一覧表にまとめ、国語科と他の学習との関連を図り、どの場面で生徒が学びを発揮することができるのかを検討した。（図３、４）国語科での学びを発揮するために、日常生活や他の学習の様々な場面で発揮する場を設定することが大切である。国語科Ａグループの生徒は、自分の経験や考え、気持ちを言葉で表現することに課題があり、それを自立活動の目標としている生徒が多い。それをふまえ提示された２コマ漫画の登場人物の状況を主語・述語、「いつ」、「どこ」などの情報を用いて説明することや、登場人物の気持ちを考え、気持ちを表す言葉で表現する学習、本単元「言葉のめいたんてい②」を設定した。この学習は、総合的な学習である「みんなのためにプロジェクト」のキャリアノートの記入を発揮する場として捉えている。キャリアノートとは活動前に目標を、活動後に振り返りを記入するものである。振り返りを記入する際、「何を頑張りましたか」「そのときはどんな気持ちでしたか」と教師が問い掛ける場面を意図的に設け、自分の頑張りやそのときの気持ちを体験と関連付けて表現することにつなげた。また、学習場面だけでなく日常生活での発揮も検討した。



Aグループの国語をどの場面で
どのように発揮できるとよいか？

- キャリアノート、作業日誌を自分の言葉で書く。やったことだけでなく、感想や自分の思いを書く！
- 帰りの会のがんばり発表でやったことと感想を話す。
- 日常生活で…
  自分の気持ちをくわしく説明する
  嫌です→～が嫌でしたなど
  自分で具体的に話す
- 自分のことを相手に伝える

（図４　中学部研究日で出た意見）

＜成果：〇　課題：△＞

〇国語科と他の各教科、他の学習活動とのつながりを意識することへつながった。

△対象教科と自立活動との関連をさらに図れるよう、単元題材一覧表の中に自立活動の欄もあるとよい。

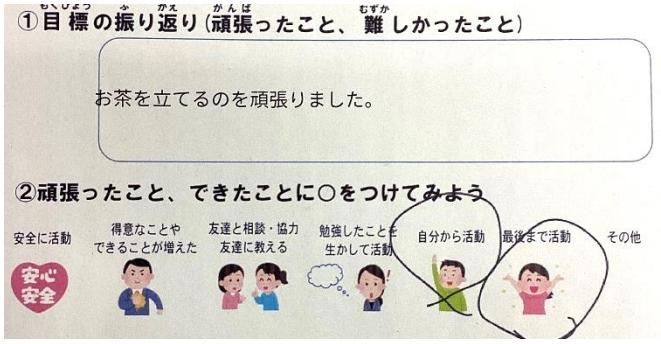
△単元題材一覧表を全職員がいつでも活用することができるようデータ化したが、研究日のみでの活用となってしまった。日頃から各教科等の学習とのつながりを確認する機会があるとよい。

ア　総合的な学習の時間「みんなのためにプロジェクト」キャリアノートの記入での発揮

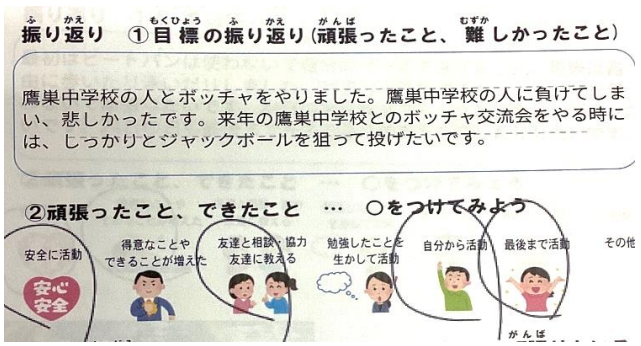
国語科での学びを発揮できるよう、振り返りを記入する際、「何を頑張りましたか」「そのときどのような気持ちでしたか」など教師が意図的に問い掛ける場面を設定した。（図５）

＜成果：〇　課題：△＞

〇「～をしました。」「～を頑張りました。」と出来事のみ記入していたが、教師が意図的に質問をすることで、「悲しかったです」のように自分の気持ちを添えて振り返りを記入するようになってきた。



６月お茶体験　キャリアノート



９月鷹巣中学校との交流

（図５　キャリアノートでの発揮）

イ　日常生活での発揮

自分の出来事を相手に伝わるように詳しく話したり、自分の気持ちを伝えたりすることができるよう、日常生活の中でも教師が意図的に問い掛ける場面を設定した。

＜成果：〇　課題：△＞

〇「とても楽しかったです」「うれしいです」「嫌でした」「悔しかったです」など自分の気持ちを教師に自分から伝えることが多くなった。「何が悔しかったのですか」と問い掛けることで、「〇〇の時間に、自分のチームが負けたからです」と状況を詳しく話すことができるようになってきている。（図６）

後半 ・２コマ漫画の説明文をつくる （主語・述語で説明する） （登場人物の表情、気持ち）	国語 ・学習を繰り返すことで主語・述語の意味が分かり、２コマ漫画を見て、一人で穴埋め（誰が、何をしているか）することができるようになってきている。	〇自分の気持ちの表現 ・自分の描いた絵画が作品展で選ばれたことを知ると笑顔で、感想を聞くと「うれしいです」と答えた ・ピン倒し大会で高等部に負けてしまった際、自分から「悔しいです」と教師に伝える姿が見られた。 ・体育の授業後、自分から「さっき楽しかったです」と教師に話すことがあった。

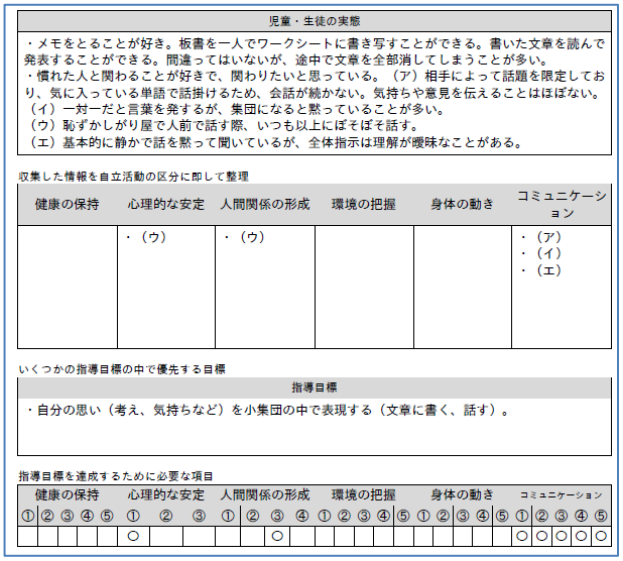
（図６　エピソード記録より）

③　自立活動の視点をふまえた単元づくり

・学部内で情報を共有した上での自立活動実態シートの検討と作成
・抽出生徒のエピソード記録の蓄積
・中学部生徒の自立活動の目標の共有

研究対象グループから対象生徒を１名抽出し、生徒の自立活動実態シートを作成、自立活動の観点からも実態を把握した。（図７）また、定期的に自立活動実態シートを用いて実態の見直しをするとともに、抽出生徒の変容をエピソード記録として蓄積し、学部職員で共有している。エピソード記録は、国語の授業で見られた様子だけでなく、他教科の授業での様子や、生活の中での様子も記録した。

中学部では研究対象グループ抽出生徒以外の生徒や、他グループ生徒の自立活動の実態や目標についても個別の支援計画、指導計画を用いて学部職員で共有している。Ａグループ生徒全員の自立活動の目標をふまえ、国語科で取り上げる単元について検討した。（図８）



児童・生徒の実態

・メモをとることが好き。板書を一人でワークシートに書き写すことができる。書いた文章を読んで発表することができる。間違ってはいないが、途中で文章を全部消してしまうことが多い。
・慣れた人と関わることが好きで、関わりたいと思っている。（ア）相手によって話題を限定しており、気に入っている単語で話掛けるため、会話が続かない。気持ちや意見を伝えることはほぼない。
（イ）一対一だと言葉を発するが、集団になると黙っていることが多い。
（ウ）恥ずかしがり屋で人前で話す際、いつも以上にぼそぼそ話す。
（エ）基本的に静かで話を黙って聞いているが、全体指示は理解が曖昧なことがある。

収集した情報を自立活動の区分に即して整理

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
	・（ウ）	・（ウ）			・（ア） ・（イ） ・（エ）

いくつかの指導目標の中で優先する目標

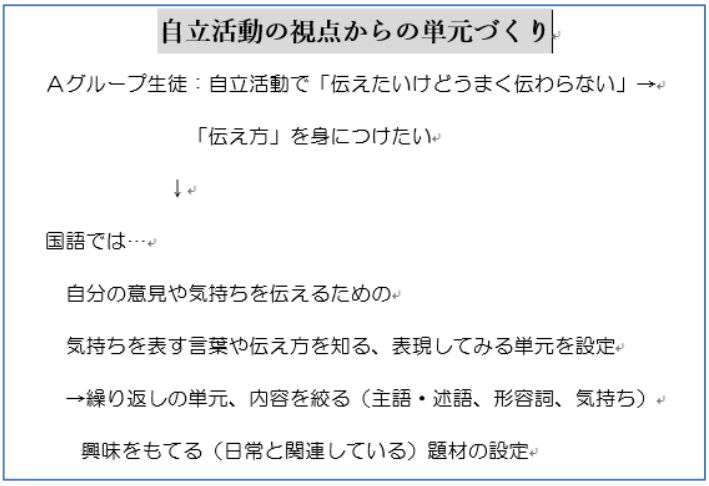
指導目標

・自分の思い（考え、気持ちなど）を小集団の中で表現する（文章に書く、話す）。

指導目標を達成するために必要な項目

健康の保持					心理的な安定			人間関係の形成				環境の把握				身体の動き					コミュニケーション				
①	②	③	④	⑤	①	②	③	①	②	③	④	①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	①	②	③	④	⑤
					○					○												○	○	○	○	○

（図７　自立活動実態シート）



自立活動の視点からの単元づくり

Ａグループ生徒：自立活動で「伝えたいけどうまく伝わらない」→

「伝え方」を身につけたい

↓

国語では…

自分の意見や気持ちを伝えるための

気持ちを表す言葉や伝え方を知る、表現してみる単元を設定

→繰り返しの単元、内容を絞る（主語・述語、形容詞、気持ち）

興味をもてる（日常と関連している）題材の設定

（図８　自立活動の視点からの単元づくり）

＜成果：○　課題：△＞

○自立活動実態シートを中学部全職員で検討し、作成したことで、その生徒の自立活動の実態や、その背景を捉え、目指す姿を検討することができた。

○Ａグループ生徒全員の個別の支援計画や指導計画を共有し、自立活動の目標を確認したことによって、Ａグループ全生徒で共通する自立活動の課題を捉え、国語科の単元づくりへ生かすことができた。

△自立活動の実態や目標の共有が年度途中になってしまった。年度初めに共有し、年間指導計画の作成へ生かしたい。

△今年度中学部は研究対象生徒１名の自立活動実態シートを学部全職員で作成した。この経験をもとに、生徒一人一人のシートを作成し、各グループでの単元づくりへ生かしたい。

△エピソード記録を蓄積することで、校内で見られた様子や変容を見取ることができた。家庭や放課後等デイサービスとの情報交換も行い、日常生活での変容も見取っていきたい。

④　学部職員全員での単元題材の検討と改善の積み重ね

・単元の目標や内容の検討と精選
・単元の改善の流れ、積み重ねの見える化

単元題材構想シート（資料５）を用いながら学部職員全員で単元の目標、指導計画、扱う題材について検討、改善を重ねた。

ア　単元の目標の検討

自立活動実態シートや、Ａグループ全生徒の自立活動の実態、目標をふまえて、単元の目標

を設定した。国語科Ａグループの生徒は、自分の考えや気持ちを言葉で表現することに課題があり、それを自立活動の目標としている生徒が多い。また、日常生活での会話では、主語・述語、「いつ」、「どこで」などの情報が抜けていることが多く、相手に伝わるように自分の出来事を説明することが難しいという様子が見られた。これらの実態をふまえ本単元「言葉のめいたんてい②」では、自分の出来事や考え、気持ちを相手に伝わるように話せるようになることを目指し、単元の目標を検討した。

７月の検討の段階で知識・技能の目標では「主語・述語、接続詞、形容詞を正しく用いて文章を書く」としていた。だが、国語科の学習を進める上で生徒の主語・述語の整理に時間を要する様子が見られたことから、「主語・述語、気持ちを表す言葉を用いてイラストや写真を説明する」、また生徒によって「『いつ』『どこで』という情報を含めた文章をつくる」ことに精選した。

思考力・判断力・表現力の目標では、「登場人物のせりふを考え、吹き出しに入るせりふを考える」こととしていた。登場人物のせりふを考えることだけでなく、「相手に伝える、伝わるために」というポイントをふまえ、イラストや写真の状況を「誰が」「何をしているのか」「どんな気持ちか」「いつ、どこでか」というように、より具体的に読み取ることを目標とした。（図９）

７月

【単元題材名】 言葉のめいたんてい②

【単元題材の目標】

・主語と述語や接続詞、形容詞を正しく用いて文章を書く。（知・技）

・せりふを話す人物の気持ちを考え、吹き出しに入るせりふを考える。（思判表）

・友達の考えた吹き出しの内容に興味をもち、自分との違いに気付く。（学、人）

１０月

【単元題材の目標】

・主語や述語、気持ちを表す言葉、「いつ」「どこで」の情報を用いて文章をつくる。（知・技）
・2コマ漫画から相手に伝えるために必要な情報を考える。（主語、述語、気持ち、いつ、どこで）（思判表）
・友達の考えた文章の表現に興味をもち、自分との違いに気付いたり取り入れたりする。（学、人）

（図９　単元目標の改善　単元題材構想シートより）

＜成果：〇　課題：△＞

〇知識・技能の目標を、「主語・述語、気持ちを表す言葉、いつ・どこでの情報が含まれているか」と具体的にし、精選したことで授業者にとって単元のゴールが分かりやすくなり、生徒の様子を具体的に評価することができた。

イ　単元の内容

・小単元の構成

本単元ではイラストや写真を相手に伝わる説明文をつくるという学習である。

小単元①「言葉のめいたんてい②～どうにゅう～」では主語・述語や気持ちを表す言葉を知ることをねらいとしている。気持ちを表す言葉の学習では、２コマ漫画の登場人物の吹き出しの内容を考える活動を設定し、状況と関連付けて気持ちを表す言葉を学習できるようにした。

それをふまえ小単元②「言葉のめいたんてい②～文づくり～」では、主語・述語、気持ちを表す言葉、「いつ」「どこで」といった情報を用いて、２コマ漫画の説明文をつくる。自分の文章が相手に伝わったか確認、実感できるよう、つくった説明文がどの２コマ漫画を説明しているか友達にクイズを出題する活動を設定した。この小単元②は「主語・述語、気持ちを表す言葉を用いる」→「『いつ』『どこで』の情報も含める」のように、ねらいの段階があがっていく。このねらいと、Ａグループ生徒の「どの場面でも自信をもって活動することが少ない」という自立活動の実態をふまえ、時数を多く設定している。

単元のまとめである小単元③は、学校行事を説明する文章づくりを行う。実際に経験した行事を取り上げることで、自身の経験を伝える力につなげている。（図１０）

Ａグループ生徒：
自信がない
↓
自信がもてるよう
時数を多く設定

自身の経験を伝える
★学びを発揮する
学習を設定

主な目標	主な内容	関連する学習	自立活動の視点での主な手立て
○言葉のめいたんてい～どうにゅう～ ・主語と述語、気持ちを表す言葉を知る。（知・技） ・２コマ漫画の吹き出しの内容を考え、発表する。（学、人）	・主語と述語、気持ちを表す言葉などの文章をつくるポイントを知る。	自立活動 生活単元学習 作業学習 総合的な学習の時間	○健康の保持 ・登校が難しい生徒も授業に参加することができるよう、オンラインでつなぐ。 ○心理的な安定 ・生徒が安心感をもてるよう教師と生徒が一対一で内容や考えを確認する時間を設ける。 ・毎時間同じ様式のワークシートを用いる。 ・ワークシートと同じように板書する。 ・見えにくさを感じている生徒はＡ３のワークシートにしたり、穴埋めにしたりする。 ・クイズ形式を取り入れ、楽しい雰囲気づくりをする。 ○コミュニケーション ・発表することに緊張感の強い生徒も相手に伝わった経験ができるよう、クイズ形式にする。
○言葉のめいたんてい～文づくり～ ・主語・述語、気持ちを表す言葉、「いつ」「どこで」の情報を用いて２コマ漫画を説明する文章をつくる。（知・技） ・登場人物の気持ちを読み取る。（思判表）	・２コマ漫画を説明する文章をつくる。（主語・述語、気持ちを表す言葉、「いつ」「どこで」） ・つくった文章を用いて、どの２コマ漫画を説明しているのかクイズを出題する。	自立活動 生活単元学習 作業学習 総合的な学習の時間	
○言葉のめいたんてい～まとめ～ ・主語・述語、気持ちを表す言葉、「いつ」「どこで」の情報を用いて、学校行事を説明する文章をつくる。（知・技） ・友達の文章の内容に興味をもち、自分との違いに気付く。（学、人）	・学校行事を説明する文章をつくる。	自立活動 生活単元学習 総合的な学習の時間 社会科	

（図１０　小単元の構成　単元題材構想シートより）

＜成果：○　課題：△＞

○「主語・述語、気持ちを表す言葉を知る」→「それらを用いて説明文をつくる」→「『いつ』『どこで』の情報も加える」のように小単元ごとにレベルアップできるような内容にすることができた。その際、「どの活動でも自信をもつことができない」というＡグループ生徒の自立活動の様子をふまえ、時数を多く設定し、繰り返し学習することで、小単元の後半には自信をもって記入する様子が見られた。

○小単元の最後には、自立活動の目標と関連付け、自身の経験を説明する説明文をつくる時間を設定したことで、これまでの学びを発揮する場面を単元の中で設定することができた。

△生徒自身が「生活に生きた」と実感できるような、より生活と関連した単元づくりを行っていきたい。

（２）生徒が主体的に学び、その学びを実感できる手立ての検討と実践

①　要点を絞った一単位時間の授業づくり

・自立活動の視点をふまえた手立ての検討（Ａグループ）

Ａグループ生徒の自立活動の実態をふまえ、一人一人の手立てを学部職員で検討した。（表１）それによって生徒の自信をもって自分の考えを記入する姿、友達に自分の文章を伝える姿につながった。

自立活動の視点での実態・課題	本授業における手立て	生徒の様子　○成果
＜Ａさん＞ ・見えにくさがある。 ・書字に時間がかかる。	→板書を書き写す時間を少なく →毎回同じ様式のワークシートを用いる。他生徒よりも大きいワークシートにする。 	○書字に要する時間が短くなり、考えることに集中することができた。

＜Ｂさん＞ ・興味関心のない内容、苦手意識がある内容だと消極的になる。 ・人前で発表することに強い抵抗 感がある。	→分かりやすい教材、内容にする。 →発言しやすい雰囲気づくり、机の配置にする。 円形での発表	○進んで文を書くことができた。 ○机を円形にして発表することで、笑顔で楽しみながら発表することができた。
＜Ｃさん＞ ・自信のなさがある。(経験不足) ・指示理解が難しい。 （イメージをもちにくい）	→手元で確認できるヒントカードを用意する。 教師と個別に考える時間を設ける。 →板書とワークシートがリンクするようにする。 全体への指示と別に個別に説明する。（本人が分かる言葉で）	○教師と一緒に考えることで自分の考えに自信をもつことができた。 ○学習内容を個別に説明することで、学習内容を理解し、参加することができた。
＜Ｄさん＞ ・体調管理や心理的な安定 （登校が難しいため）	→リモートで中継して授業に参加できるようにする。 発言を促す。	○学校に居る友達と一緒に学習していると感じることができ、登校しているときと同じように学習に参加できた。

（表１　自立活動の視点での実態・課題とそれを踏まえた手立て、成果）

・他グループの自立活動の視点を踏まえた一単位時間の授業づくり、手立て

学習グループ	実態 →	手立て →	生徒の様子
B	・集中力の持続 ・国語科に苦手意識 （「自分はできない」と発言）	・興味、関心のある内容を題材に（生き物、俳句、図鑑など）	・苦手と感じている国語科の授業に積極的に取り組んだ。 ・５０分間取り組むことができた。
C	・同じ学習活動の継続が難しい。 ・口頭での説明の意味理解が難しい。	・一単位時間の授業で「読む」「書く」「話す」活動を設け、メリハリをつける。 ・演示、ＩＣＴ機器を用いて説明、解説	・活動にメリハリがあることで５０分間学習に向かうことができた。 ・モニターに注目し、説明を理解することができた。
D	・発音が不明瞭で相手に伝わらないことがある。 伝えたい気持ちがある。 →相手に伝える手段や表現の仕方を身につけたい。	・実物や実際の写真と関連付けて物の名前を学習 ・実際に体を動かして動きを表す言葉を学習	・語彙の拡充につながった。 ・伝えたいことの単語がわからないとき、動作や知っている。 言葉で相手に伝えることができた。
E	・気持ちや考えはあるが、言葉で表現することが難	・実際の写真やイラストを用いた言葉の学習	・国語科の授業に楽しく向かうことができた。

	しい。知っている言葉は話して表現できる。	・「給食」など身近な題材や好きな物事を用いて学習	・語彙の拡充につながった。

（表２　Ｂ～Ｅグループ手立てと生徒の様子）

＜成果：○　課題：△＞

○授業づくりで当たり前のように行っていた手立てについて、生徒の実態を関連付けながら、根拠づけて検討、見直すことができた。その手立てが効果的であったか振り返ることにつながった。

△研究対象のＡグループは、授業内での手立てや、それによって見られた生徒の様子を学部職員で共有することができた。他グループについては、各グループで検討した手立てによる生徒の様子を共有した。手立ての検討についても学部職員で情報交換しながら行うとよい。

・要点に絞った授業改善の積み重ねと、有効な方法や手立ての具体化

事前授業研究会を通し、以下の成果と課題が挙げられた。（表３）

	成果	改善すべき点
導入	○ワークシートの様式 ・板書との対応	△めあて「分かりやすく説明しよう」 「分かりやすく」の意味を生徒が分かっていたか
展開	○教師の働きかけ ・生徒一人一人に寄り添う姿勢 ・生徒の考えを受け入れる態度 ・生徒のつまずきへの対応 →生徒の安心感へつながった ○自信をもって取り組む生徒の姿 ・主体的に取り組む姿 ・「できました」と大きい声で発言しながら提出する姿 ○ＩＣＴ機器の効果的な活用 ・タブレットを用いることで書字の負担軽減	△２コマ漫画の情報量 情報量が少なく、生徒が自由に発想してしまい、漫画と関係のない説明文になった →２コマ漫画の情報量の検討 誰が、どこで、何をしているのか、どんな気持ちなのかが分かりやすいものに 「いつ」「どこで」などの情報を加えなければ相手に伝わらないような２種類の似ている２コマ漫画を用意し、説明する必要性を【改善①】 △生徒の視線 タブレットを見ている時間が長い 友達に視線を向ける時間があったか
まとめ		△まとめ めあてが達成していたか（分かりやすい文章になっていたか）を個人、全体で確認する場面がたりない
全体		△本時の目標　目標とする内容の多さ →主語・述語、気持ちを表す言葉を用いて 相手に伝わる文章をつくることに精選 △めあて、まとめ、振り返りの内容とつながり →【改善②】

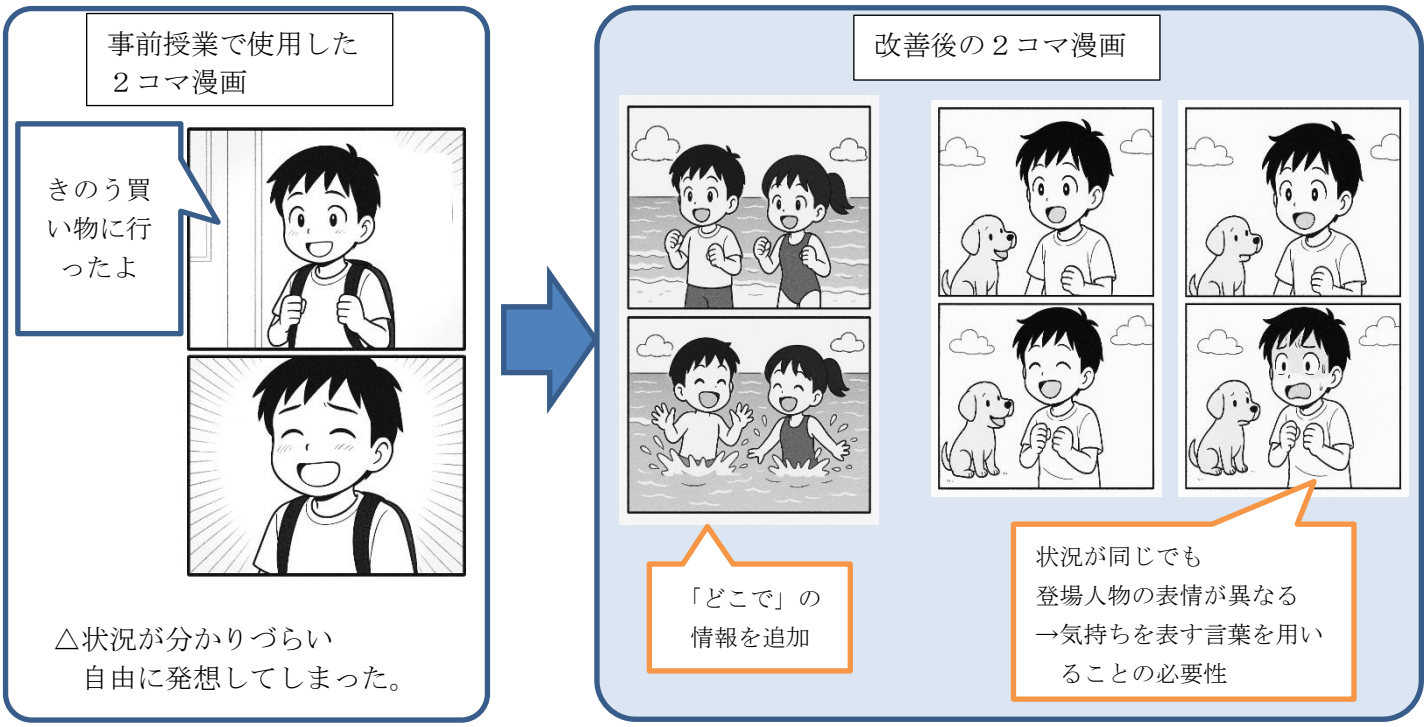
（表３　１０月２０日事前授業研究会）

【改善①　教材（取り上げる２コマ漫画）】

本単元ではＣｈａｔ　ＧＰＴで作成した２コマ漫画を用いている。イラストがシンプルで情報量が少なく、生徒にとって情報を読み取る難易度が低いため用いることとした。２コマ漫画の題材は、自分への置き換えや、実生活へのつながりが生まれるよう、生徒の経験や生活に近いものを取り上げた。

事前授業で取り上げた２コマ漫画は図９の左である。この２コマ漫画は情報量が少なく、生徒が自由に発想できたことから、漫画と関係のない説明文ができてしまった。自由に発想する良さはあるが、本時の目標「２コマ漫画を説明する」を達成する教材としては適さなかった。

それを踏まえ、２コマ漫画を、「誰が、何をしているのか」が分かりやすいイラストにしている。また、「誰が、何をしているのか」状況は同じでも、登場人物の表情や、場所や時間が異なる漫画を用いる。それによって友達にどの漫画を説明しているのか分かるように伝えるために、気持ちを表す言葉や、「いつ」「どこで」といった情報を文章に含める必要性を与えることとした。（図１１）



（図１１　２コマ漫画の改善）

＜成果：○　課題：△＞

○２コマ漫画を教材に用いたことで、生徒が「今日はどんな漫画だろう」と国語の授業を楽しみにしている様子が見られ、主体的に学ぶことへつながった。

△生徒の生活経験の少なさから、２コマ漫画を読み取ることが難しいことが多かった。生徒の生活経験や語彙を把握することで、より生徒の実態に応じた教材を用いることができただろう。

△生徒にとって２コマ漫画の情報量が少なく、文章にすることが難しい様子が見られた。２コマではなく、１つのイラストの中にいくつもの情報を加え、教師と会話をしながらイラストの状況を整理するなどの活動によって、語彙の拡充や表現の仕方を学習することへつながったと考えられた。

【改善②　めあて、まとめ、振り返りの内容とつながり】（図１２）

・めあて

「ポイントを入れて友達に伝わる文を書こう」とし、「ポイントを使うこと」、「友達に伝わる文を書くこと」が本時のゴールであることが生徒に分かるようにした。

・まとめ

自分がつくった文章が実際に友達に伝わるのか確認するために、クイズを出題する活動を設定した。自身の文章を発表し、どの２コマ漫画を説明しているか友達が答えるという内容である。「友達が正解する＝友達に伝わる文を書くことができた」のように、めあてを達成したか確認できるようにした。また、教師がポイントを使っている部分に印を付けることで、めあての「ポイントを入れて」の部分が達成したか確認することで、学びの実感につなげている。

・振り返り

文章づくりを通して、分かったことや気付いたことを生徒の言葉で記入する。まとめで自身の学びを実感し、振り返りの記入で学びを発揮することをねらいとしている。

事前授業の流れ

導入	展開	まとめ、振り返り
・めあての提示 「わかりやすく説明しよう」 △「何を、どのように」本時のゴールが分かりづらい	・わかりやすい文章のポ イントの確認 ・文章づくり	・友達の文章を見る ・振り返りを個人で自由に記入

改善後

導入	展開	まとめ、振り返り
・めあての提示 「ポイントを入れて友達に伝わる文を書こう」 →○本時頑張ることが、 「ポイントを入れる」こと、「友達に伝わる文を書く」ことだと生徒が分かる	・わかりやすい文章のポ イントの確認 ・文章づくり	・友達に伝わるか　クイズの出題 →どの２コマ漫画を説明しているか友達にクイズを出題する（机を円形に配置し、発表の抵抗感を減らす） ○めあての「友達に伝わる文」になったか確認 ○ポイントを入れていたか全員で確認、学びの実感 ・振り返り個人で記入 →分かったこと、気付いたことを記入する　○学びの発揮へ

（図１２　めあて、まとめ、振り返りの改善）

＜成果：○　課題：△＞

○生徒にとって本時のゴールが分かるめあてになった。それによって「ポイント（主語・述語、気持ちを表す言葉、いつ、どこで）を入れたか」、「自分の文章が友達に伝わったか」を振り返ることができた。

△まとめでは、言葉でのまとめだけでなく生徒によって気付いたことを記入する時間を設けることで、本時の学びの実感につながると考えられた。

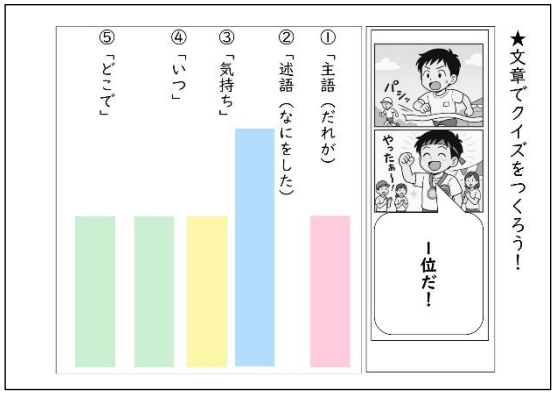
○自分の説明文が友達に伝わるかクイズを出題する場面を設定したことで、発表することに強い抵抗感があった生徒が「楽しいな」と発言するなど、相手に話す、伝わる楽しさを感じることができた。相手に伝わることで、文を書くことに自信をもつことができ、達成感を感じることにつながった。

② ＩＣＴ機器の活用と改善

・活用のねらいの明確化

・活用方法の改善の積み重ね

本時では、２コマ漫画の状況（だれが、何をしているか、登場人物の気持ち）を整理し、説明文を考える活動でロイロノートを使用した。（図１３）Ａグループでは書字に時間を要する生徒が数名おり、ワークシートでの記入では書くこと、消すことに集中してしまう。文章を考えることに十分な時間を確保することができるよう、毎日各教科で使用し、操作に慣れているロイロノートを用いることとした。また、ロイロノートを活用していることで、病気のため登校が難しい生徒も、Ｆａｃｅ　Ｔｉｍｅというビデオ通話ができるアプリケーションを用いた。（写真１）その他にも、モニターを活用して友達の文章を提示することで、生徒同士の学び合いを深めた。



（図１３　ロイロノート上の画面）

（写真１　Ｆａｃｅ　Ｔｉｍｅを使用したリモート授業）

また、ＩＣＴ機器と紙媒体のバランスも検討した。本単元ではすべてロイロノートで学習するのではなく、ワークシートも使用する。（写真２、３）ロイロノートではこれまでの学びを振り返る際、データを探すことに時間を要していたが、ワークシートをファイリングすることで、容易に振り返ることができた。生徒の実態に応じたＩＣＴ機器の活用を国語科各グループで検討した。

（写真２、３　タブレットとワークシートを併用する様子）

＜成果：〇　課題：△＞

〇生徒の実態と学習活動をふまえロイロノート、Ｆａｃｅ　Ｔｉｍｅ、モニターを用いたことで各生徒が各学習活動に集中することができ、効果的にＩＣＴ機器を活用することができた。

〇ＩＣＴ機器と紙媒体それぞれの良さを検討し、場面によって効果的に使い分けることができた。

△タブレット端末を用いることで、生徒の視線がタブレット端末に集中することが多くなってしまった。集団での学習で対話的に学べるよう、集団学習の中でのタブレット端末の使い方について検討していきたい。

８　成果と課題のまとめ

成果

（１）生徒が学習を積み重ね、その学びを発揮する単元づくり

・国語科の各グループで実態把握をし、国語科の単元づくりや評価に生かすことができた。

・単元題材一覧表を活用することで、国語科と他教科や他の学習活動との関連を意識することができた。

・自立活動実態シートを学部全職員で検討しながら作成したことで、その生徒の実態や背景について考え、目指す姿を見出すことができた。

・生徒の実態や自立活動の課題をふまえて、単元の目標や小単元の構成を検討することができた。

（２）生徒の学びの実感につながる一単位時間の授業づくり

・研究対象のＡグループ全生徒の自立活動の実態、課題をふまえ、授業での手立てを改めて検討したことで、自信をもって取り組む姿や、苦手な活動に対して「おもしろい」と発言する姿がみられるようになった。

・生徒が興味をひく教材を用いたことで、主体的に取り組むことができた。また、めあてを生徒にとってわかりやすい表現にし、まとめでそのめあてを達成したか振り返る活動を設けたことで「今日のめあてを達成できた」という実感につながった。

・生徒の自立活動の実態に合わせたＩＣＴ機器の活用によって、各学習活動に集中して取り組むことができた。また、ＩＣＴ機器と紙媒体のバランスも検討し、効果的に活用することができた。

課題

（１）生徒が学習を積み重ね、その学びを発揮する単元づくり

・より「丁寧な」実態把握のために、複数の職員で情報交換をしながら実態把握をし、実態の基準（○、△、×など）をより具体的に設定する必要があった。

・単元題材一覧表の中に自立活動の項目を設けるなど、自立活動と対象教科、他教科とのつながりをより意識できるようにしたい。

・今年度は対象生徒１名について学部職員で情報交換し、自立活動実態シートを作成した。
今後は全生徒の実態シートを作成し、対象教科全グループの単元・授業でづくりにより生かしていきたい。

・エピソード記録の蓄積によって、校内での生徒の変容を見取ることができたが、家庭や放課後等デイサービスでの様子も情報交換し、学びを発揮する姿を見取っていきたい。

（２）生徒の学びの実感につながる一単位時間の授業づくり

・研究対象グループでの授業づくりで出された意見や改善点を他グループでの授業づくりへ生かし、学部全体で授業改善に取り組む。

・個人の学習におけるタブレット端末の効果的な活用ができたが、集団での学習における効果的な活用については検討が必要であった。ＩＣＴ機器の効果的な活用による、対話的な学習を検討する。

高　等　部

高等部の研究について

１　研究主題

児童生徒が学びを発揮する姿を目指した授業づくり
～自立活動の視点をふまえた国語科の指導を通して～　　（１年／３か年）

２　学部研究の重点

・自立活動の視点をもった指導内容の精選
・めあてと振り返りの方法の改善
・語彙力の向上

３　重点の設定理由

昨年度高等部は、生徒が主体的に学び、その学びを実感する授業づくりとして、国語科の単元や授業づくりに取り組んだ。単元計画や、教材の検討を行ったことで、高等部国語科において重視している「伝え合う力」および「表現する力」を生活単元学習の中で発揮し、友達を気遣う表現を自ら選択し、話合い活動に主体的に参加できる姿を確認することができた。授業の導入段階では、めあての共有に加え、その達成に向けた具体的な学習活動を生徒とともに確認することで、学習への見通しをもたせるよう工夫した。また、ＩＣＴ機器の活用として、前時の振り返りをモニターで共有するとともに、ロイロノートを用いた個別の振り返りを行うことで、生徒が自らの学習状況を見える化しやすい環境を整えた。これらの手立てにより、生徒には互いを意識した発言や、ねらいに即した言語表現を選択しようとする姿が見られ、話合い活動の質的向上が確認された。一方で、指導の根拠となる学習状況の把握については、発言の記録や思考の変容を示す資料の収集が十分でない場面が存在した。また、まとめの段階において、生徒が「何を理解したのか」「どの程度達成できたのか」を教師が客観的に把握するための仕組みについては改善の余地があると考えられる。さらに、生徒の伝え合う力を一層高めるためには語彙量の不足が課題として認められ、表現の幅を広げるための系統的な語彙指導の必要性が示唆された。

昨年度までの成果と課題をふまえ、本年度の学部研究では上記三点を重点として設定した。多様なニーズをもつ生徒が主体的に参加するためには、一人一人の特性やつまずきに応じて指導内容を精選することが必要である。自立活動の視点から実態を把握することで、必要な国語科の指導内容を効果的に絞り込めると考える。また、生徒が学習の見通しをもち、活動の意義を理解するためには、「めあて」が明確で具体的であることが重要である。学習後の振り返りは自己調整力の育成に寄与するがめあてが抽象的であったり、振り返りが形式的になったりすると、生徒が「できたこと」や「次に生かすこと」を実感しにくい課題が見られた。このため、めあての具体化と振り返りの改善を重点化した。さらに、語彙力の不足は学習参加や自己表現を阻む要因であり、昨年度に引き続き語彙指導の充実を重点として位置付けた。

４　研究仮説

国語科を対象教科とし、単元づくりでは、単元立案の段階から自立活動の視点をふまえ、生徒が他の場面で学びを発揮する姿を目指して他の学習場面や日常生活と関連付けていく。授業づくりでは、要点を絞った授業改善や具体的で有効な手立ての検討を積み重ねていく。これらの実践を積み重ねていくことで、単元や授業の質が向上し、生徒が主体的に学習活動に取り組むとともに、学びを実感し身に付けた学びを他の学習場面や日常生活の中で発揮しようとする姿が見られるだろう。

５　研究内容・方法

（１）生徒が学習を積み重ね、その学びを発揮する単元づくり

①生徒の丁寧な実態把握とその実態の共有
・国語科学習指導要領に基づいた実態把握
・実態の定期的な見直しと共有

②生徒が学びを生かすことができる単元の立案
・年間を見通せる単元題材一覧表の作成
・他の学習との効果的な関連や学びの実感、発揮する場の見える化

③自立活動の視点をふまえた単元づくり
・学部内で情報を共有した上での自立活動実態シートの検討と作成
・生徒の自立活動の目標、変容の共有、エピソード記録の蓄積

④学部職員全員での単元題材の検討と改善の積み重ね
・単元の目標や内容の検討と精選
・単元の改善の流れ、積み重ねの見える化

（２）生徒の学びの実感につながる一単位時間の授業づくり

①要点を絞った一単位時間の授業づくり
・自立活動の視点をふまえた手立ての検討
・要点を絞った授業改善の積み重ねと、有効な方法や手立ての具体化
・他の学習グループの授業について知る・考える機会の設定

②ＩＣＴ機器の活用と改善
・活用のねらいの明確化
・活用方法の改善の積み重ね

６　高等部研究計画

月	主な内容
４月	**【研究日】** ・高等部研究の方向性の確認 **【単元・題材検討日①】** ・単元題材一覧表の作成
５月	**【単元・題材検討日②】** ・国語科の年間指導計画の検討 ・国語科で大切にしたいことの確認 ・「主体的に学ぶ姿」「学びを実感する姿」の確認 **【研究日】** ・国語科各グループの実態把握 （指導内容確認表／熊本大学教育学部附属特別支援学校を基に）
６月	**【研究日】** ・ＩＣＴミニ研修（Ｎｕｍｂｅｒｓについて） ・自立活動の流れ図を検討・作成 ・国語科各グループのエピソード記録
７月	**【研究日】** ・対象グループの単元・題材構想の検討（単元題材構想シートを用いて） ・ＩＣＴミニ研修（ｉＰａｄアプリについて） **【単元・題材検討日③】** ・国語科各グループの取組の振り返りと年間指導計画の見直し、共有 ・単元題材一覧表の検討、見直し **【教材展示会】** ・国語科、数学科の教材展示会
８月	**【研究日】** ・自立活動実態シートを活用した授業改善の検討 ・国語科各グループのエピソード記録を学級毎に検討

９月	**【研究日】** ・「主体的に学ぶ姿」「学びを実感する姿」、国語科で大切にしたいことの確認 ・対象グループの単元・題材構想の検討（単元題材構想シートを用いて） **【単元・題材検討日④】** ・指導案検討①（単元の目標、指導計画の検討）
１０月	**【研究日】** ・第１回全校授業研究会の振り返り ・指導案検討②（本時の検討）
１１月	**【事前授業研究会】** ・事前授業研究会授業提示、研究会 **【研究日】** ・指導案検討③（手立ての検討）
１２月	**【研究日】** ・模擬授業 ・全校授業研究会に向けた取組の確認 **【全校授業研究会】** ・全校授業研究会授業提示、研究会
１月	**【研究日】** ・学部研究のまとめ（成果と課題）
２月	**【単元・題材検討日⑤】** ・今年度の振り返り
３月	**【研究日】** ・次年度の研究に向けて

７　研究の実際

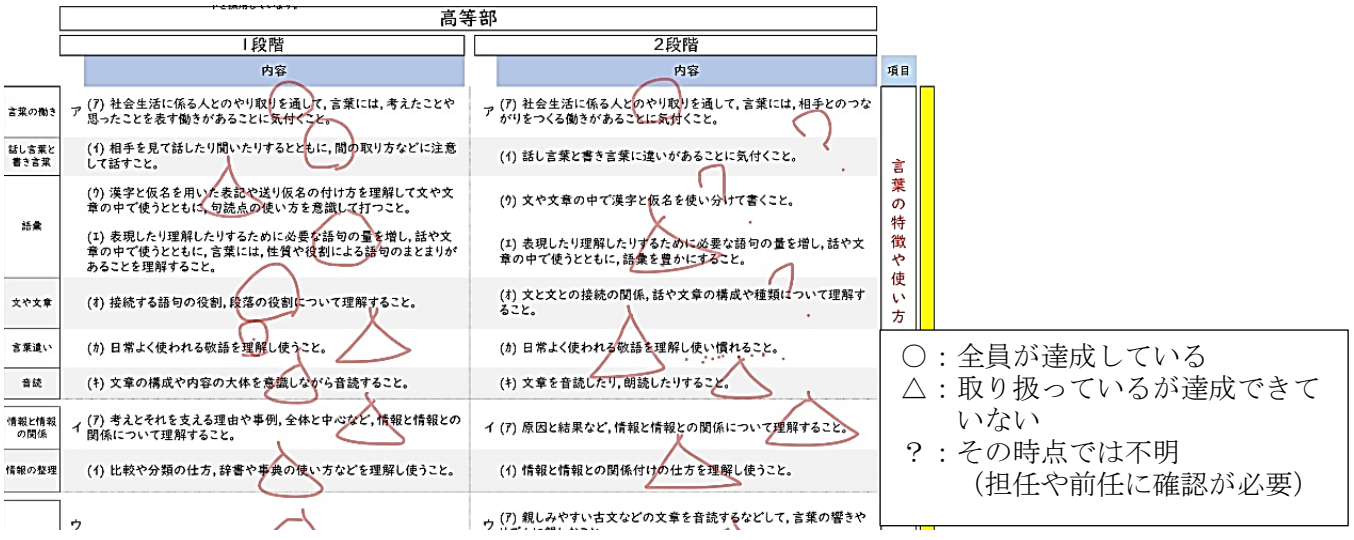
（１）生徒が学習を積み重ね、その学びを発揮する単元づくり

①生徒の丁寧な実態把握とその実態の共有

・国語科学習指導要領に基づいた実態把握

・実態の定期的な見直しと共有

学習指導要領の指導内容確認表（熊本大学教育学部附属特別支援学校）を基に、国語科の各グループ（Ａ～Ｅグループ）で実態把握を行った。指導内容確認表を用いることで、学習指導要領を基にして生徒の得意とする内容や課題があることを明らかにすることができ、年間指導計画や単元計画に反映することができた。５月に１回目の実態把握を行い、その際に見られた生徒の実態をふまえて８月にもう一度実態把握を行ったことで、より具体的で丁寧な実態把握をすることができた。



（図１：指導内容確認表（一部））

＜成果：〇　課題：△＞

〇細やかに実態把握をすることにつながった。担当教員で見取ることができなかった際に、担任や前任の担当に確認する機会を設けることができた。

△単元が進む中で「△→〇」（できるようになった）を考慮した単元の再考はできなかった。

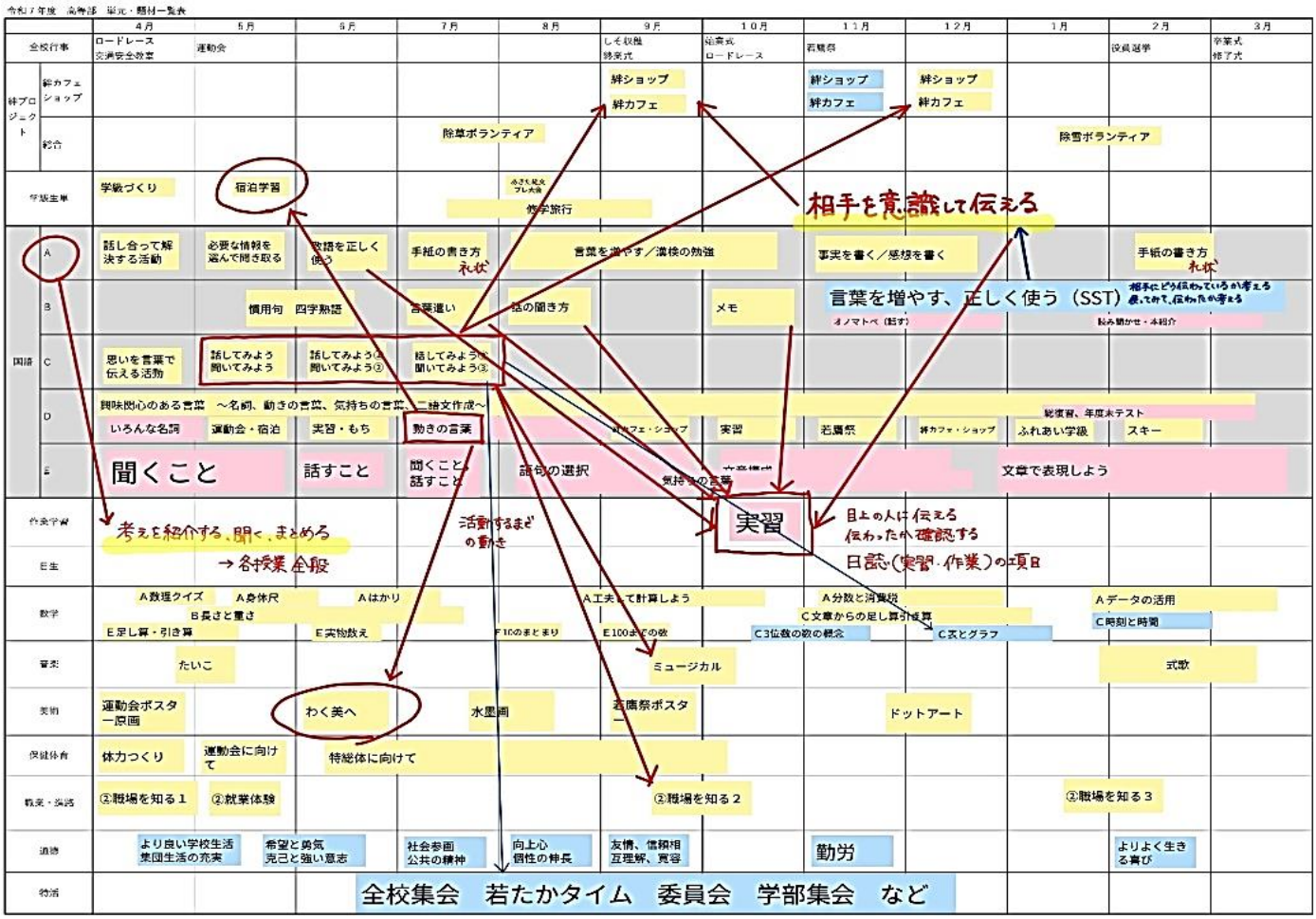
△研究日を通して２回活用することはできたが、普段の授業で逐次確認する活用はできなかった。

②生徒が学びを生かすことができる単元の立案

・年間を見通せる単元題材一覧表の作成

・他の学習との効果的な関連や学びの実感、発揮する場の見える化

年間の学習内容とその内容を単元題材一覧表（図２）にまとめ、国語科と他の学習との関連を図り、どの場面で生徒が学びを発揮することができるのか検討した。国語科の学びは、日常生活や他の学習の様々な場面で発揮することができるが、関連する学習の中でも意図的に発揮する場を設定することが大切であると考えた。学びを発揮する場を設定することで、生徒の学びを発揮する姿を教師が見取ることができ、様々な教師から即時評価されることで生徒の自信や学びの実感につながると考える。国語科Ａグループの単元「豊かな表現で伝え合おう」では、討論を通じて他者の見方や考え方を認めることや、考えを吟味するすべを学習していくため、話合い活動や日常生活での会話など様々な場面で国語科での学びを発揮することができると考える。



（図２：単元題材一覧表）

＜成果：〇　課題：△＞

〇一年の見通しをもち、年度途中で見直す機会があることで、修正を見える化して考えることができた。

〇複数教科の年間指導計画を行き来しなくても内容のつながりを見つけることができて、有効な取組だった。

△Ａグループだけでなく、他グループの国語科での学びも他教科や他の学習場面でどのように発揮できるか検討していく必要がある。

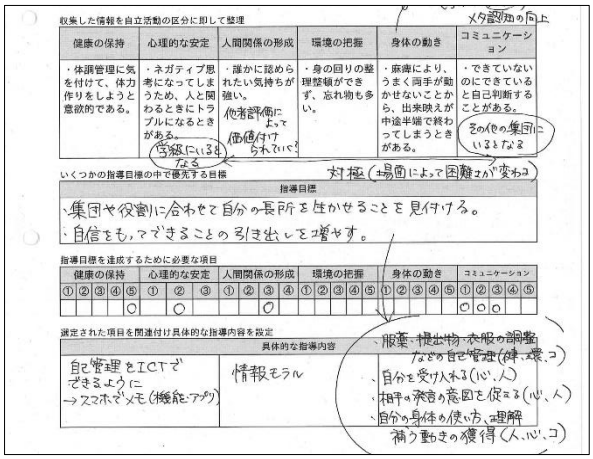
③自立活動の視点をふまえた単元づくり

・学部内で情報を共有した上での自立活動実態シートの検討と作成

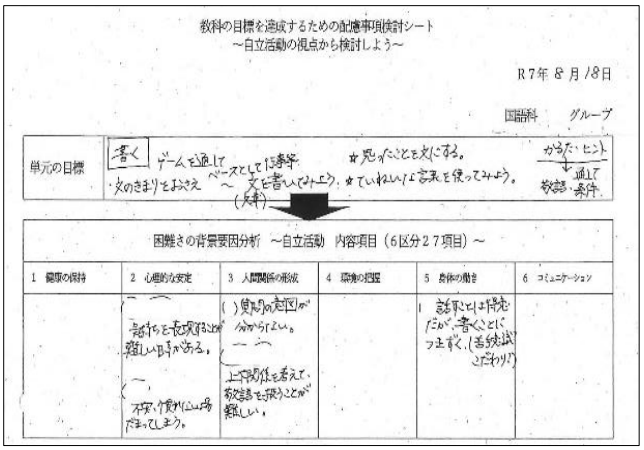
・生徒の自立活動の目標、変容の共有、エピソード記録の蓄積

自立活動実態シート（図３）を活用し、国語科と自立活動の視点の関連を検討した。単元目標から、生徒の困難さの背景要因を分析し、教科の目標を達成するための配慮事項検討シート（図４）に整理した。整理したことにより、国語科の学習において必要な個別の手立てを考えることができた。単元終了時に評価を行い、次単元に生かすことのできる配慮を積み重ねていきたい。

また、国語科各学習グループで国語科の学習を他教科や日常生活の場面で発揮できているかエピソード記録として蓄積し、共有している。国語科の指導教員だけではなく、担任視点など集団を変えて様々な場面で見取り、検討した。



（図３：自立活動実態シート）



（図４：教科の目標を達成するための配慮事項検討シート（一部））

＜成果：○　課題：△＞

○一人一人の生徒の自立活動について考える時間をもつことができ、細かく分析することができた。

○各学習グループそれぞれの生徒の困難さの背景要因を見える化することで、国語科の単元で抑えるべき自立活動の内容項目を精査することができた。

△単元毎に評価を行い、次の単元に結び付けることができると考えるため、配慮事項検討シートの継続した活用が必要である。

△エピソード記録を定期的に書く時間を設けても良い。職員室で誰でも追記できるような形や月１回の研究日で毎回検討する時間を設けたい。

④学部職員全員での単元題材の検討と改善の積み重ね

・単元の目標や内容の検討と精選

・単元の改善の流れ、積み重ねの見える化

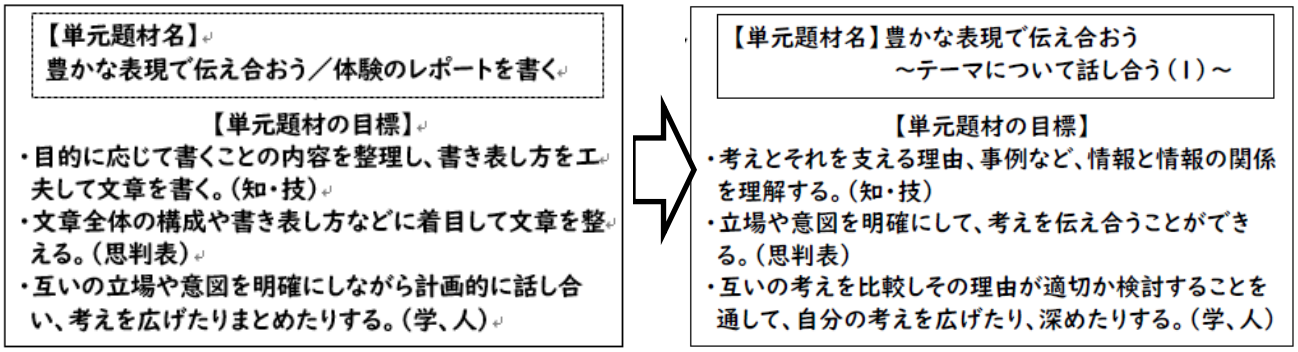
単元題材構想シートを用いながら学部職員全員で単元の目標、指導計画、扱う題材について検討、改善を重ねた。

ア　単元の目標の検討、目指す生徒の姿の確認

単元題材構想シートの目標部分（図５、６）を活用し、国語科Ａグループの単元の目標の検討、及び単元終了時に目指す生徒の姿の確認を行った。Ａグループの学習到達度を見ると、学習指導要領高等部１段階にある「情報と情報の関係【知・技】」、「話合い【思判表】」「記述【思判表】」の３点から、本単元は話合いを通して伝え合う学習を設定していた。単元終了時に「相手の立場に立って物事を考える姿、相手の意見を認め、自分の意見を吟味する姿」に到達するために、生徒の実態と照らし合わせて単元の目標を検討した。

当初は経験したことを新聞記事のように書き表す学習を計画していたが、「過ぎたことは振り返らず、切り替える」思考の生徒が多かったため、文章を書く学習を取り入れても過ぎたことを書くテーマは意欲につながらないのではないかという意見が出た。また、伝え合いの方法も「書く」のか「話す」のか絞った方がよいという案が出たことから、「書く」ことに焦点を絞り、単元を作っていくことになった。それに伴い、単元目標も「情報と情報の関係【知・技】」「話合い【思判表】」の２点で目標を改善した。項目を２点に絞ったことで、重点が明確になり、より深い学びが生まれると考えた。

また、今回扱わない「記述【思判表】」はこの単元を２部構成（（１）と（２）に分ける）にすることで、次単元の学習計画に含めることとした。



（図５　単元題材構想シート　９月時点）　　（図６　単元題材構想シート　11 月時点）

イ　単元の内容の検討

・小単元の構成

本単元の目指す生徒の姿は「相手の立場に立って物事を考える姿、相手の意見を認め、自分の意見を吟味する姿」である。そのためには相手に意見を根拠に基づいて分かりやすく伝える必要がある。本単元では、自分の意見の根拠（事例）を的確に相手に伝えるために必要な情報を小単元で取り上げていく。（図７）

期間	主な目標	主な内容
９月	・事実と意見、原因と結果など、情報どうしの関係について理解し、考えを支える事例の妥当性や説得力を検証する。（知・技）	事実と意見① ・文章から事実と意見を読みとる練習をする。また、根拠（事実）を明確にして自分の意見や考えを文章やスピーチで伝える。
１０月	・伝える目的に応じて情報を集める。（知・技） ・比較したり分類したりすることで必要な情報を選ぶ。（思・判・表）	比較と分類 ・文章を読んで、情報を比較したり分類したりする練習をする。
１１月	・伝える目的に応じて情報を集め、具体例を示すことで、説得力のある意見を述べる。（思・判・表）	具体化・抽象化 ・文章を読んで情報を理解し具体例を挙げたり、情報を一般化したりする練習をする。
１２月	・互いの立場や意図を明確にしながら、テーマについて事例に基づいた理由を述べながら話し合う。（思・判・表） ・自他の意見と理由を参考にして、考えを広げたり深めたりする。（学・人）	事実と意見② ・テーマについて意見を伝え合い、事例を吟味して、最終的な自分の考えを文章にまとめる。

根拠（事例）を挙げる方法やポイントを学習する

相手の意見を受け止め、根拠となる事例を吟味する練習

（図７　単元題材構想シート　※一部）

・小単元の中での授業の組み立て方

小単元「事実と意見②」では、実際に様々なテーマで生徒が２つの意見に分かれて話合いをする学習である。前時までに学習した根拠に基づいて情報を精査し、生徒が時間を掛けてじっくり自分の主張を考える時間や、話合い活動に取り組んでほしいことから、二単位時間を一セットとし、授業を組み立てることとした。（図８）

前時	立場を明確にし、主張（根拠に基づいた事例・理由）を考える。まとめる。
本時	前時を基に話合い活動をする。

（図８　高等部研究日で出た意見）

＜成果：○　課題：△＞

○目標を精選したことで指導内容を整理して設定することができた。

○単元題材構想シートを活用する中で、一単位時間で深めたい内容を整理することができ、二単位時間を一セットに授業の組み立てを変えることができた。

（２）生徒の学びの実感につながる一単位時間の授業づくり

①要点を絞った一単位時間の授業づくり

・自立活動の視点をふまえた手立ての検討

各学習グループ生徒の自立活動の実態をふまえ、一人一人の手立てを学部職員で検討した。（図９）それによって生徒が自信をもって話合いに参加する姿、友達の意見を認める姿が見られるようになってきた。

困難さの背景要因分析　～自立活動　内容項目（６区分２７項目）～

1　健康の保持	2　心理的な安定	3　人間関係の形成	4　環境の把握	5　身体の動き	6　コミュニケーション
	・自己肯定感が低い ・つまづくと乗り越えようとせず避けようとする	・多方面な捉え方が苦手 ・当事者意識が薄い ・自分事として捉えられない	・コミュニティが狭い、関わる人が狭い ・集中力が短すぎる ・外部刺激に敏感		・言葉通りに捉えてしまう ・経験の少なさ

生徒氏名	各生徒への配慮事項	関連する内容項目	目標達成度（5段階）
[redacted](A)	書きやすい、視覚的に分かりやすいシート、矢印	【3－（1）】	
[redacted](B)	書きやすい、視覚的に分かりやすいシート、矢印	【3－（1）】	
[redacted](C)	意欲的に取り組める題材、身近な題材	【6－（5）】	
[redacted](D)	意欲的に取り組める題材、身近な題材	【6－（5）】	
[redacted](E)	意欲的に取り組める題材、身近な題材、例を示す。	【6－（5）】	

（図９　教科の目標を達成するための配慮事項検討シート（国語科Ａグループ））

＜成果：○　課題：△＞

○自立活動の視点をふまえて各生徒の配慮事項を検討することができた。また、その手立てを基に教科の目標の達成度を単元終了後に検討することができた。

△目標達成度を評価後、次単元につなげることができなかった。

・要点を絞った授業改善の積み重ねと、有効な方法や手立ての具体化

事前授業研究会を通し、以下の成果と課題が挙げられた。（表１）

	成果	改善点
導入	○前時までの学び、考え方のベース ・前時までの学習内容がホワイトボードに提示されている	△テーマの精選 ・テーマの言葉の捉えを確認 ・生徒が話し合いたいテーマだろうか。
展開	○生徒の学習への意欲 ・生徒が積極的に発言 ・相談しながら考えている生徒がいた	△話合い活動におけるＩＣＴ機器の活用 ・話合い中に互いの顔を見ず、ｉＰａｄの画面を見ている。 ・話型に捉われて、発表の内容に集中できていない。 △質問や反論の時間 ・５分だと短い。深めるためにはもう少し時間が必要。
まとめ		△まとめの提示の方法 ・まとめの前の評価が教師の主観に感じた →個人のまとめで当てはまる部分に線を引くなどフィードバックにつながる手立てを。 △個人のまとめを深める ・「○○さんの～という意見が納得のいく意見だったから、自分は意見を変えた」というまとめが出てくるといい。

（表１　11月５日事前授業研究会）

【改善①　テーマの精選】

単元の前半では、様々なテーマで話合いを行っていたが、生徒が興味をもてるテーマかどうかが、話合いの盛り上がりに大きく影響していることが分かった。そこで後半では、授業内でアンケートを行い、生徒が「みんなで話したい」と思うテーマを基に内容を決めた。また、テーマの言葉の意味について、生徒が同じイメージをもてるように、授業の始めや前時に簡単に確認する時間を設けた。共通の理解があることで、話題がずれたり意見が飛躍したりすることが減り、話合いがよりスムーズに進むようになった。

当初は、全校縦割り活動「若たかタイム」で行うレクリエーション案について話し合う予定であった。しかし、小学部・中学部の実態をどの程度知っているかが分からず、根拠のある意見を出しにくいのではないかという意見が出た。そこで、普段から関わりのある高等部の仲間を対象に「学部集会お楽しみコーナー」を考える学習へと内容を変更した。

【改善②　話合いを支える教材と学習環境の工夫】

事前研究会では、話型カードやｉＰａｄのロイロノートに気を取られ、顔を上げずに発言してしまう場面が見られた。そこで、話型カードは数時間のみ使用し、その後は徐々に使用を控えた。その結果、生徒はカードを見なくても、適切な言葉を使って話し合えるようになっていった。

また、最初は電子黒板と生徒のｉＰａｄに同じ画面（ロイロノートの共有ノート）を常に映していたが、必要なときだけ電子黒板にミラーリングし、それ以外は電源を切るようにした。この工夫により、生徒同士がしっかり顔を見て話せるようになり、やり取りが以前よりも活発になった。

【改善③　学習課題と振り返り、まとめを深める手立て】（図 10）

・展開（最終的な自分の考えをまとめる場面）

まとめの前に、話合い活動を経て自分の考えをまとめる場面では、理由を記述する形を取っていた。しかし、意見の変容を文章から読み取ることが難しかったため、意見が変わった生徒と変わらなかった生徒の話型を分けることで、意見の深まりや意見の変化を文章から実感できるようになった。

・まとめ、振り返り

事前研究会では、教師がまとめの文言をあらかじめ決めていて、生徒に提示していた。教師主導でまとめを行っているため、生徒が本当に理解したのか確認できない。そこで、生徒からまとめの文言を引き出すため、空欄にして発問をした。生徒は展開の最後にまとめた考えから、本時に学んだ要素を自分の言葉でまとめることができ、学びを深めることができた。

【改善前】

学習課題	展開（最終的な自分の考えをまとめる場面）	まとめ、振り返り
「相手に考えを伝えるときに、どうすれば理解されやすいのか。」	テーマについて私は賛成／反対だ。なぜなら、･･･ △意見の変容を文章から読み取ることが難しかった。	【まとめ】 「相手に考えを伝えるときは理由に事例を加えると理解されやすい」 △教師がまとめの文言を決めて提示している。 【振り返り】 生徒がワークシートに書く。

【改善後】

学習課題	展開（最終的な自分の考えをまとめる場面）	まとめ、振り返り
「どのような事例があれば考えが伝わるのだろうか」	私はＡに賛成だ。なぜなら、･･･からだ。～という意見もあるかもしれない。しかし、･･･ので、･･･と考える。 私はＢに賛成だ。はじめはＡだと考えていたが、･･･という事例を知り、･･･に気付いたため、考えを変えた。 →意見の変化を文章で表すことができるように、カードを分けて話型を提示した。 ⇩ 意見の深まりや変化を文章から実感できるようになった。	【まとめ】 「考えを伝えるためには（このような事例）があると伝わりやすい。」 →生徒からまとめの文言を引き出すために、空欄にして発問した。 ⇩ 生徒が自身で学んだことを表出することで学びの実感へつながる。 【振り返り】 生徒がワークシートに書く際に、話合い活動の中の良い発言や批判的な思考を言葉掛けで伝える。

（図 10　学習課題と振り返り、まとめを深める手立ての改善）

＜成果：○　課題：△＞

○生徒が活発な議論ができるようなテーマを繰り返し再考することができた。

○話型の提示により、生徒の意見の深まりや変化を自分で実感する手立てを講じることができた。

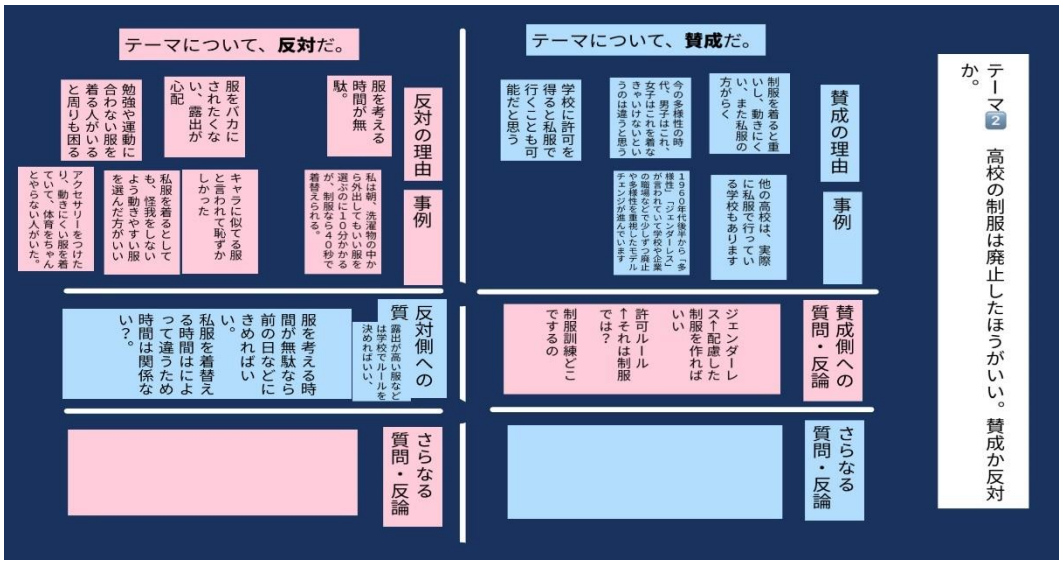
△一単位時間の授業を見ていく中で、学習課題の文言は再考できたが、導入部分の改善には至らなかった。

②ＩＣＴ機器の活用と改善

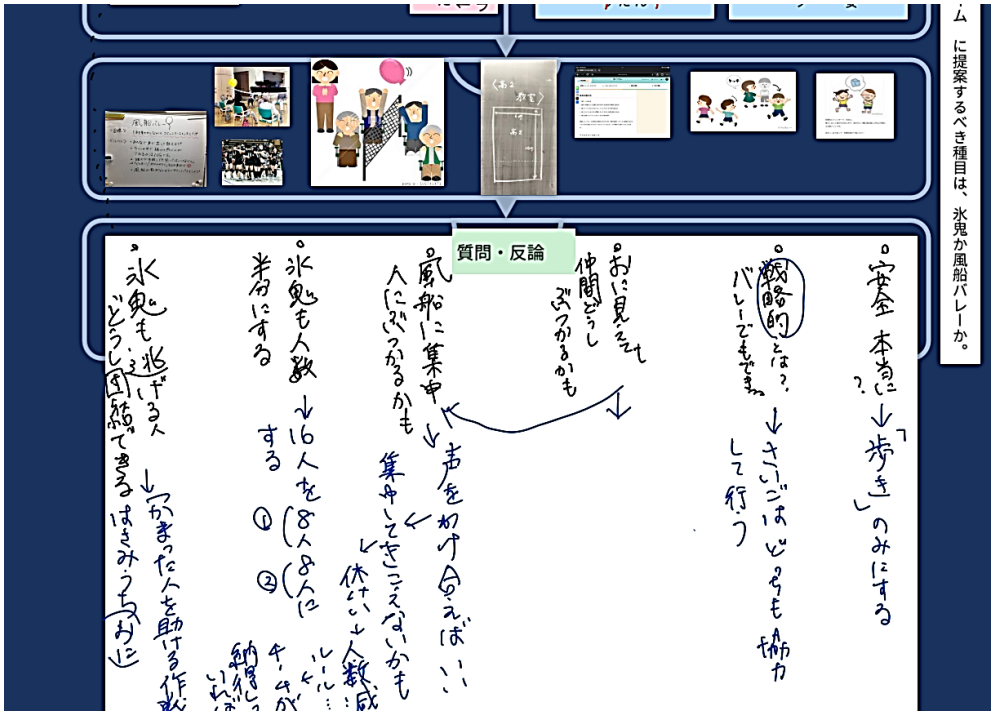
・活用のねらいの明確化

・活用方法の改善の積み重ね

本単元では、生徒が話合い活動を通じて自分の意見を吟味する学習である。当初ＩＣＴ機器は展開場面で生徒が活用することとしていた。前時までにまとめたロイロノートのメモを活用して話合いに生かすことで、話合いが活発に行われ、生徒が主体的に学習に取り組む姿が見られた。（図 11）しかし、生徒が画面を凝視してしまい話合い活動が円滑に進まないことを考慮し、生徒の話合い活動を教師がロイロノートで議事録として残し、話合いを経て自分の最終意見をまとめる場面では、議事録を教師がロイロノートで共有する（図 12）ことで、話合いの内容を確認することができ、学びを実感する姿が見られた。



（図 11　ロイロノートのメモ）



（図 12　ロイロノートの議事録）

＜成果：〇　課題：△＞

〇教師が議事録を取ることで、生徒が話合い活動に集中して取り組むことができていた。

〇ロイロノートに自分の意見をメモして発表に生かすことで、相手に情報を的確に伝えることができた。

△自分の意見に自信がもてないことから、ｉＰａｄを手放せない生徒もいた。

△ロイロノートに残すメモの情報量を精選し、簡潔にメモを取る方法を前単元などで触れる必要があった。

８　成果と課題のまとめ

成果

・生徒一人一人の実態を多面的に把握し、担任や前任者との情報共有を通して、困難さや背景要因を見える化することができた。
・年間の見通しをもった指導計画の立案と年度途中での見直しにより、目標や指導内容の修正を見える化して検討することができた。
・複数教科の年間指導計画のつながりを整理し、教科横断的な視点から有効な指導計画を構築することができた。
・自立活動の視点をふまえて目標を精選し、指導内容を整理・簡素化するとともに、単元題材構想シートを活用して授業構成の改善につなげることができた。
・各学習グループの実態に応じて、国語科単元で重点的に扱う自立活動の内容を明確にし、配慮事項や手立てを基に単元終了後の振り返りを行うことができた。
・話合い活動において、話型の提示やＩＣＴ機器の活用、教師による議事録作成を通して、生徒が主体的に意見を交流し、考えを深める姿が見られた。

課題

・単元途中で見られた生徒の変容を十分に生かしきるまでには至らず、「できるようになった点」をふまえた単元構成や指導内容の再検討については、今後の課題として残った。
・研究用のシートや資料を日常の授業で継続的に活用することが難しく、評価や振り返りを次の単元へ十分につなげることができなかった。抽出生徒を決めて経過を追っていくなど負担のない取組が必要である。
・国語科での学びが他教科や他の学習・生活場面でどのように生かされているかについて、学習グループ間を含めた検証が不十分であった。
・授業改善において、学習課題の精選は進んだものの、導入部分の構成や提示方法の工夫には課題が残った。
・ＩＣＴ機器やメモに頼る場面が見られたため、生徒が安心して自分の言葉で発信できるよう、段階的な支援や事前指導の在り方を検討する必要がある。